朝霧

宮浦 達也 ※

山行集’

１９８５年５月～２００９年１１月
（入会）

東京朝霧山岳会

表紙※　宮浦達也（本人）　自筆
表写真：谷川岳 烏帽子尾根にて

こよなく谷川岳を

愛した 宮浦へ

山行報告　１９８５’昭和６０年　　**８５年２月～８６年１月**

6、16	鹿沼の岩場	田村、西原、伊藤、村上（正） 村上（浩）、山口×２ 川内×２、小島、宮浦、広田
7、14	表丹沢 戸沢の岩場	伊藤、宮浦
7、21	谷川岳幽ノ沢 右俣 Ｖ字状岩壁右ルート	伊藤、西原、宮浦
8、4	表丹沢 戸沢の岩場	伊藤、広田、宮浦
8、10～18	剣岳 合宿 本峰南壁 A1　八峰マイナーピーク東面スラブ 八峰　Ⅵ峰Ｄフェース 富山大 池ノ谷右俣奥壁ドーム稜　チンネ左稜線	西原、山口、山口（玲）、村上（正） 村上（浩）、広田、宮浦、伊藤
8、25	表丹沢 四十八瀬川 新茅ノ沢	伊藤、宮浦
9、8	奥多摩 天狗岩	伊藤、宮浦
9、14～16	南ア 北岳 バットレス 第４尾根 主稜	伊藤、宮浦
10、10～13	南ア 北岳 バットレス ＲＩルート	伊藤、宮浦
10、20	奥多摩 天狗岩（ゲレンデ）	伊藤、宮浦、塚田
11、3～ 4	八ヶ岳 阿弥陀岳 南稜　　赤岳 北峰リッジ	伊藤、宮浦、塚田、山口 山口（玲）
11、10	奥多摩 天狗岩（ゲレンデ）	伊藤、宮浦
11、23～24	八ヶ岳 阿弥陀岳 北稜　（雪上訓練含）	田村、山中、村上（正）、 村上（浩）、伊藤、宮浦
12、29～ 1	北ア 槍ヶ岳 硫黄尾根（小次郎ノコル迄）	田村、伊藤、宮浦、塚田

山行報告　１９８６’　昭和６１年　　**８６年２月～８７年１月**

2、16	御坂　大幡川　四十八滝沢	塚田、宮浦
2、23	谷川岳 西黒尾根	伊藤、宮浦、塚田
3、1～ 2	八ヶ岳 阿弥陀岳 北西稜　横岳西壁 中山尾根	塚田、宮浦
3、8～ 9	谷川岳 一ノ倉沢 一ノ沢左稜～東尾根 一・二 中間稜～東尾根	西原、宮浦 伊藤、塚田
3、21～24	八ヶ岳 東面 旭岳東稜～赤岳～地蔵尾根	伊藤、宮浦
3、30	奥多摩 天狗岩	伊藤、宮浦、塚田
4、13	谷川岳 マチガ沢（雪上講習）	村上、伊藤、宮浦、塚田、渡辺
5、11	奥多摩 つづら岩（ゲレンデ）	伊藤、宮浦、塚田、鈴木

5、17～18　谷川岳 一ノ倉沢 烏帽子岩南稜～西黒尾根　伊藤、宮浦
衝立岩 中央稜～北稜(下降)

5、25　奥武蔵 天覧山　伊藤、宮浦、鈴木

6、 8　丹沢　広沢寺（ゲレンデ）　田村、山口、村上、宮浦、鈴木

6、22　三浦半島 鷹取山　田村、伊藤、宮浦、鈴木

7、27　谷川岳 一ノ倉沢　烏帽子奥壁凹状岩壁～コップ緑ルート　田村、宮浦

8、 3　谷川岳 一ノ倉沢 烏帽子奥壁中央カンテ～六ルンゼ右俣(下降)　田村、山口、塚田、宮浦
～三ルンゼ
二ルンゼ～Ｂルンゼ　伊藤、鈴木

8、31　谷川岳 一ノ倉沢 烏帽子奥壁 変形チムニー(下部)　田村、宮浦
～烏帽子奥壁 ダイレクト(上部)～衝立岩 雲稜第２ルート～北稜(下降)

谷川岳 一ノ倉沢 衝立岩中央稜～北稜(下降)～堅炭沢(救助)　西原、伊藤、鈴木

8、24　丹沢　広沢寺（ゲレンデ）　宮浦、鈴木

9、28　谷川岳 幽ノ沢 右俣 左方ルンゼ～芝倉沢　伊藤、宮浦

9、29　谷川岳 一ノ倉沢 衝立岩 ダイレクトカンテ　宮浦、鈴木
～北稜（下降）

11、 2～ 3　南ア 甲斐駒ヶ岳 赤石沢奥壁 中央稜　伊藤、塚田、宮浦

11、23～24　八ヶ岳 横岳西壁 裏同心ルンゼ　伊藤、宮浦

12、28～ 3　南ア 北岳 バットレス 第４尾根主稜　塚田、宮浦、鈴木
西原(支援)

12/28　甲府～夜又神の森～深沢下降点～義盛新道～C1
12/29　池山小屋～砂払の頭～ボーコンの頭～C2
12/30　北岳 バットレス　緩傾斜帯トラバース～第四尾根主稜取付 B1
12/31　第四尾根主稜～第一コル～B2
1/1　第四尾根主稜～頂上～C3
1/2　C3～砂払の頭～池山小屋～深沢下降点～夜又神の森～民宿
1/3　民宿～甲府

1、10～11　南ア 甲斐駒ヶ岳 黒戸尾根～尾白渓谷　伊藤、宮浦

1、15　奥秩父 笛吹川 東沢 乙女ノ沢　伊藤、宮浦

山行報告　１９８７’　昭和６２年　　**８７年２月～８８年１月**

2、8	奥秩父 乾徳山 （ゲレンデ）	伊藤、宮浦、塚田
2、15	中ア 宝剣岳 極楽尾根（敗退）	山口、伊藤、宮浦、鈴木
3、7～ 8	谷川岳 一ノ倉沢 一ノ沢左稜～一ノ沢（下降） 幽ノ沢 ノコ沢（遭難救助）	伊藤、塚田、宮浦、小嶋、鈴木
3、21～22	谷川岳 一ノ倉沢 烏帽子奥壁南稜 一・二 中間稜～東尾根	伊藤（守）、宮浦、小嶋 西原、鈴木
4、5	三浦半島 鷹取山（ゲレンデ）	塚田、宮浦
4、19	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	宮浦
5、31～ 1	谷川岳 一ノ倉沢 αルンゼ右凹状スラブ～一ノ倉尾根（下降）	山口、伊藤（守）、塚田、宮浦
6、8	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	宮浦
8、6	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	宮浦、清水（久）
8、9	幽ノ沢 中央壁 左フェース（敗退）	伊藤（守）、宮浦
8、12～16	北ア 剣岳 合宿 池ノ谷右俣～剣尾根主稜（下半～上半）	伊藤（守）、塚田、宮浦、鈴木
9、3	御坂　三ッ峠（ゲレンデ）	宮浦、鈴木
9、12～15	南ア 北岳 バットレス（企画） 12　ｂガリー大滝　（伊藤、清水） 13～14 下部フランケ～上部フランケ～中央稜～Ｃガリー奥壁　（塚田、宮浦） 〃　第四尾根～中央稜（鈴木、伊藤、清水） 15　ピラミッドフェース（伊藤、宮浦）	伊藤、塚田、宮浦、鈴木、清水（久）
10、3～ 4	奥秩父 金峰山（イベント）	海老原（道）、宮浦 他
10、10～11	谷川岳（紅葉見物山行） 一ノ倉沢 南稜フランケダイレクト 一ノ倉沢 ひょんぐりの滝（敗退） 中芝新道～西黒尾根 幽ノ沢 中央壁左フェース（敗退） マチガ沢 シンセン沢右俣～東尾根	伊藤（守）、塚田、宮浦、小嶋、畠中 塚田、小嶋 宮浦 伊藤（守）、畠中 塚田、小嶋 伊藤（守）、宮浦、畠中
10、18	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	塚田、宮浦
1、1～ 3	八ヶ岳 権現岳～硫黄岳～本沢温泉	宮浦
1、16～17	奥秩父 双子山	塚田、宮浦

山行報告　１９８８’　昭和６３年　　**８８年２月～８９年１月**

4、24	丹沢　水無川 源次郎沢右俣～水無川本谷	宮浦
5、1～ 5	北ア 後立山 不帰～爺ヶ岳（春合宿） 不帰　五竜東面 ＧＶ稜	伊藤、宮浦、山口
5、14～15	御坂　三ッ峠（ゲレンデ）	塚田、宮浦
5、29	奥秩父 笛吹川 東沢 東ノナメ沢	伊藤、宮浦
6、2	奥多摩　越沢バットレス（ゲレンデ）	宮浦、鈴木
6、5	三浦半島 鷹取山（ゲレンデ）	塚田、宮浦
6、11～12	谷川岳 東面 堅炭沢 βルンゼ*	伊藤*、塚田、宮浦 鈴木*、阿部（渓流会） 伊藤*（氷河）
6、21	奥多摩 丹波川 本流（三条新橋～手取淵）	宮浦、鈴木
7、2～ 3	奥秩父 小川山	塚田、宮浦、小島
7、10	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	塚田、宮浦
7、24	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	塚田、宮浦
7、30～31	御坂　三ッ峠（ゲレンデ）	塚田、宮浦
10、2	谷川岳 一ノ倉沢 中央稜～北稜（下降） 烏帽子奥壁中央カンテ～南稜（下降）	宮浦、林 伊藤（守）、鈴木（典）
10、9	谷川岳 一ノ倉沢 衝立岩 雲稜第一ルート～北稜（下降）	山口、宮浦、鈴木（典）
10、16	奥多摩　越沢バットレス（ゲレンデ）	宮浦、鈴木
11、3	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	宮浦、林
12、10～11	南ア 甲斐駒ヶ岳 戸台川 藪沢 双児沢	塚田、宮浦、小島
1、7～ 8	八ヶ岳 阿弥陀岳 広河原沢 本谷 三ルンゼ 横岳西壁 裏同心ルンゼ	宮浦、小島

山行報告８９’　　**８９年２月～９０年 １月**

2、10～11	八ヶ岳　横岳西壁　小同心クラック 大同心雲稜ルート	塚田、宮浦
4、29～5、3	北ア 爺ヶ岳 北稜～鹿島槍ヶ岳 牛首尾根	塚田、宮浦、小島
8、11～15	北ア 穂高（夏合宿） 滝谷ドーム北壁　クラック尾根	宮浦、鈴木、清水

10、21	御坂　三ッ峠（ゲレンデ）	宮浦、小島、清水 他
10、28	奥多摩 氷川屏風岩　　（ゲレンデ）	塚田、宮浦、小島、清水 他
11、3～ 5	北ア 遠見尾根～五竜岳～鹿島槍ヶ岳～赤岩尾根	塚田、宮浦、清水
12、9	谷川岳 天神平（一ノ倉 天候悪く中止）	宮浦、小島
12、16～17	八ヶ岳 ジョウゴ沢 裏同心ルンゼ 大同心ルンゼ大滝周辺	宮浦、小島
12、28～1、3	北ア　硫黄尾根～槍ヶ岳～横尾尾根（正月合宿）	伊藤、宮浦、小島、鈴木、伊藤（氷河）
1、20～21	南ア　荒川出合　２ルンゼ（正面大滝） ３ルンゼ（右のナメ滝）	宮浦、小島

山行報告９０’　　**９０ 年２月～９１年 １月**

2、3	足尾 松木沢 横向沢 夏小屋沢	宮浦、小島、鈴木
4、30	丹沢 水無川 木ノ又大日沢～蓑毛	伊藤、宮浦、清水
5、27	奥多摩 つづら岩　（ゲレンデ）	清水、林（稜渓）、西川（霧峰） 伊藤、宮浦、伊藤（氷河）
6、9～10	奥多摩 雲取山（鴨沢～雲取～奥多摩駅）	伊藤、宮浦、伊藤（氷河）
6、17	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	宮浦、鈴木、清水
7、22	谷川岳 一ノ倉沢 衝立岩 ダイレクトカンテ ～北稜（下降）　　゜（中途敗退）	塚田、宮浦 ゜鈴木（典）、゜清水（久）
7、29	御坂 三ッ峠 屏風岩（ゲレンデ）	塚田、宮浦、清水
8、12～13	谷川岳 一ノ倉沢 烏帽子奥壁凹状岩壁～北稜（下降）	塚田、宮浦
9、2	谷川岳 一ノ倉沢 滝沢下部ダイレクト～滝沢本谷右稜 ～Ｂルンゼ	塚田、宮浦
9、2	谷川岳 一ノ倉沢 烏帽子奥壁南稜～南稜（下降）	鈴木（典）
9、23～24	谷川岳 一ノ倉沢 滝沢下部ダイレクト～第三スラブ ～ドーム壁（横須賀）	塚田、宮浦、鈴木（典）
11、18	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	宮浦、小島
11、24～25	八ヶ岳　赤岳西壁 ショルダー 第二尾根	塚田、宮浦、清水
12、2	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	宮浦、鈴木
12、23～24	八ヶ岳 阿弥陀岳 南稜	宮浦、清水、林（稜渓）
12、29～1、2	北ア 西穂～奥穂～涸沢岳西尾根（重傷者救出）	宮浦、鈴木、山口

山行報告９１’　　**９１ 年２月～９２年 １月**

8、17～18	谷川岳 一ノ倉沢 烏帽子奥壁南稜　中央稜	塚田、宮浦
9、1	谷川岳 一ノ倉沢 凹状岩壁～北稜（下降）	塚田、宮浦
10、20	三浦半島 鷹取山	宮浦、小島
11、2～ 4	北ア 唐松岳～不帰ノ剣～白馬岳	山口、吉田、宮浦
12、30～ 2	北ア 前穂 北尾根（３峰下まで）	塚田、宮浦、小島

山行報告９２’　　**９２ 年２月～９３年 １月**

5、2～4	黒部 別山 南尾根	山口、伊藤、宮浦
11、29	谷川岳 西黒尾根～いわお新道～水上	伊藤、宮浦
12、12～13	八ヶ岳 阿弥陀岳 広河原沢 右俣	伊藤、宮浦、林（稜渓）
12、30～ 3	南ア 甲斐駒 尾白川 坊主ノ沢（下半）～ 北坊主ノ沢～坊主ノ沢（上半）下降～ 滑滝沢（岩溝ルート）～本峰	伊藤、宮浦、伊藤（氷河）

山行報告９３’　　**９３ 年２月～９４年 １月**

5、1～4	北ア 剣岳 八ッ峰三稜～Ⅰ峰（Ⅰ・Ⅱ峰間ルンゼ下降）	山口、宮浦
6、20	奥多摩 つづら岩 （ゲレンデ）	宮浦、松山
6、27	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	宮浦、山口、清水、松山、木戸
8、13～17	北ア 前穂 北尾根～奥穂～北穂（夏合宿）	宮浦、山口、松山
8、29	谷川岳 一ノ倉沢 烏帽子奥壁中央稜～北稜（下降）	宮浦、松山、木戸
9、12	谷川岳 厳剛新道～西黒尾根	伊藤、宮浦、松山、山崎
9、15	奥多摩 つづら岩 （ゲレンデ）	宮浦、松山
9、19	奥多摩 天狗岩 （ゲレンデ）	伊藤、宮浦、清水、松山、木戸
9、25～26	谷川岳 一ノ倉沢 テールリッジ～南稜 （番組撮影協力）	西原、伊藤（守）、宮浦、松山、木戸
10、9～11	南ア 北岳 バットレス　ｂガリー ピラミッドフェース（上半部） ～第四尾根主稜*	伊藤*、宮浦、清水、木戸*
11、3	御坂 三ッ峠 屏風岩（ゲレンデ）	宮浦、松山、木戸
11、27～28	八ヶ岳 渋ノ湯～天狗岳～硫黄岳～横岳 赤岳～美濃戸	宮浦、松山、木戸
12、12～13	八ヶ岳 阿弥陀岳 広河原沢 本谷 ３ルンゼ～阿弥陀岳	宮浦、山口、木戸、伊藤（氷河）

12、30～ 3	北ア 唐沢岳(幕岩) 東尾根 七倉～唐沢岳東尾根～餓鬼岳～白沢	伊藤、宮浦、山口、松山、 伊藤(氷河)
1、22	御坂 大幡川 四十八滝沢	伊藤、宮浦、松山、林(稜渓)
1、23	奥秩父 笛吹川 東沢 乙女ノ沢	宮浦、松山、林(稜渓)

山行報告９４' **９４年２月～９５年 １月**

2、6	日光 雲龍渓谷	宮浦、西原、松山、木戸
2、11～12	八ヶ岳 赤岳東面 東稜	宮浦、山口、伊藤
3、19～20	谷川岳 一ノ倉沢 滝沢リッジ～Ａルンゼ 一ノ倉沢 一･二ノ沢中間リッジ～東尾根	宮浦、山口、伊藤(英) 伊藤(守)、松山、木戸
4、17	谷川岳 マチガ沢 (雪上訓練)	宮浦、西原、山口、伊藤、 松山、木戸、山崎、岡村、大山
4、29～ 3	北ア 立山 剣岳 八ツ峰主稜(Ⅰ峰三稜～) ～早月尾根 (春合宿)	宮浦、山口、木戸
5、21～22	一ノ倉沢 烏帽子奥壁南稜 烏帽子奥壁凹状岩壁～北稜(下降)	宮浦、木戸
5、26	丹沢 四十八瀬川勘七ノ沢	宮浦、西原、鹿目、伊藤、松山、山崎、 吉野、岡村、大山
6、4～ 5	足尾 松木沢 ジャンダルム周辺	宮浦、西原、山口、松山、木戸 山崎、吉野、岡村、大山
6、18	奥多摩 天狗岩 (ゲレンデ) 盆堀川 椣葉窪*	宮浦、松山、木戸、山崎 伊藤*
7、3	丹沢 広沢寺 (ゲレンデ)	宮浦、松山、大山、伊藤
7、17	谷川岳 一ノ倉沢 三ルンゼ	宮浦、塚田
7、24	谷川岳 一ノ倉沢 烏帽子奥壁中央カンテ	宮浦、伊藤(英)
7、31	丹沢 水無川 源次郎沢右俣～水無川本谷	宮浦、塚田、山崎、大山、岡村
8、12～16	北ア 剣岳 (夏合宿) 平蔵谷～本峰南峰ＡⅠ稜、Ⅱ稜 八ッ峰主稜(下半部)～Ⅴ・Ⅵノコル 別山南尾根 スラブ状ルンゼ(中途敗退) 源次郎尾根	宮浦、伊藤、山口、塚田、清水、 松山、山崎、大山、岡村
8、28	谷川岳 一ノ倉沢 烏帽子奥壁凹状岩壁～北稜(下降)	宮浦、小嶋、伊藤(英)
9、4	谷川岳 一ノ倉沢 烏帽子奥壁中央カンテ～南稜(下降)	宮浦、大山、岡村、伊藤(守) 清水(久)

10、9～10	谷川岳 一ノ倉沢 衝立岩ダイレクトカンテ～北稜(下降) 三ルンゼ 一ノ倉沢 烏帽子奥壁中央稜～北稜(下降) 幽ノ沢 左俣 中央ルンゼ	木戸、伊藤(英) ←正式入会 宮浦、松山 塚田、大山 宮浦、塚田、松山、大山
10、23	御坂　三ッ峠（ゲレンデ）	宮浦、小島
11、27	奥秩父 乾徳山 （ゲレンデ）	宮浦、木戸、岡村、伊藤Ｊｒ
12,18	上州 古賀志山（ゲレンデ）	宮浦、小島、岡村、小島Ｊｒ
12、24～25	八ヶ岳 横岳西壁 裏同心ルンゼ	宮浦、木戸
1、22	御坂　大幡川　四十八滝沢	宮浦、山口

山行報告９５’　　**９５年２月～９６年 １月**

3、12	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	宮浦、大山
3,21	丹沢 大倉尾根～塔ヶ岳	宮浦
5、3～ 6	北ア 鹿島槍ヶ岳 天狗尾根～爺ヶ岳～新越尾根 北ア 鹿島槍ヶ岳 赤岩尾根～爺ヶ岳～赤沢岳 ～針ノ木岳	宮浦、塚田 伊藤、清水
6、18	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	宮浦、西原、平野
7、23	奥多摩 天狗岩　（ゲレンデ）	宮浦、大山
7、30	奥多摩 天狗岩　（ゲレンデ）	宮浦、芳野
8、6	谷川岳 一ノ倉沢 烏帽子奥壁 南稜	宮浦、大山
8、10～16	北ア　穂高（夏合宿） 前穂右岩稜～Ａフェース 北穂 滝谷 第四尾根 前穂 四峰 松高ルート 槍ヶ岳～北穂 北穂東稜	山口、宮浦、塚田、芳野 大山、岡村、平野
8、27	谷川岳 幽ノ沢 右俣 左方ルンゼ	宮浦、松山、大山
9、23	谷川岳 一ノ倉沢 烏帽子奥壁凹状岩壁～北稜(下降)	宮浦、松山
10、1	谷川岳 一ノ倉沢 烏帽子奥壁変形チムニー	宮浦、大山
10.10	足尾 松木沢 ウメコバ尾根左岩稜(ゲレンデ)	宮浦、山口、松山、大山
10,22	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	宮浦、大山
11、12	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	宮浦、大山
11、12	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	宮浦、平野

12、2～ 3	八ヶ岳 甲斐大泉～権現岳～キレット小屋 赤岳～硫黄岳	宮浦、平野
12、9～10	八ヶ岳 横岳西壁 裏同心ルンゼ	伊藤、宮浦、木戸、大山、平野
1、6～ 7	八ヶ岳　東面 旭岳東稜～権現岳～天女山	宮浦、平野
1、13～14	八ヶ岳　清里～天狗尾根～赤岳～美濃戸	松山、宮浦、大山、平野

山行報告９６’　　**９６年２月～９７年 １月**

2、4	御坂　大幡川　四十八滝沢	宮浦、伊藤、平野
2、10～12	八ヶ岳　清里～赤岳東面 センターリッジ 赤岳西壁 ショルダー右リッジ	宮浦、木戸、平野
3、2～3	八ヶ岳 阿弥陀岳 北西稜	宮浦、木戸、大山
3、10	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	宮浦、 木戸、大山
5、1～ 5	北ア 白馬岳 双子尾根～不帰Ⅲ峰Ａ、Ｂ尾根 ～八方尾根	宮浦、塚田、木戸、大山、平野
5、17～19	御坂　三ッ峠（ゲレンデ） 事故発生(詳細別項目)	宮浦、 平野 木戸、大山(18～19) 塚田 (19 のみ)
6、1～ 3	御坂　三ッ峠（ゲレンデ）	宮浦、平野
6、6	谷川岳 一ノ倉沢 衝立岩 ダイレクトカンテ ～北稜（下降）	宮浦、 大山
6、16	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	宮浦、大山
6、30	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	宮浦、大山
7、14	谷川岳 一ノ倉沢 烏帽子奥壁中央カンテ	宮浦、平野
7、30～31	谷川岳 一ノ倉沢 中央稜～北稜(下降) 南稜～南稜(下降) 凹状岩壁～北稜(下降)	宮浦、平野
9、8	谷川岳 一ノ倉沢 衝立岩正面壁 雲稜第二(エスケープ)ルート～北稜（下降）	宮浦、大山、平野
9、8	谷川岳 一ノ倉沢 (雨天敗退)～芝倉沢出合	宮浦、大山、平野
9、28～29	谷川岳 一ノ倉沢 滝沢下部ダイレクトルート ～第三スラブ～ドーム壁 横須賀ルート 幽ノ沢 右俣 Ｖ字状岩壁右ルート 一ノ倉沢 衝立岩 ダイレクトカンテ	宮浦、大山 伊藤、平野
10、20	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	宮浦、大山、伊藤(JR)
11、4	丹沢　広沢寺（ゲレンデ）	宮浦、伊藤(JR)、大山、平野

12、14～15	八ヶ岳 大同心南稜～ドーム 中山 尾根	大山、伊藤(JR)
	雪上 訓練、硫黄岳（往復）	宮浦、岡村、中島
	ジョウゴ沢 Ｆ２右岸支沢	伊藤、清水
12、22～23	八ヶ岳 赤岳西壁 石尊稜	宮浦、平野
	雪上 訓練	西原、坂井
	阿弥陀岳 広河原沢 本谷 三ルンゼ	塚田、木戸

山行報告９７’ **９７年２月～９８年 １月**

2、8～ 9	八ヶ岳 赤岳 東稜 横岳西壁 小同心クラック 大同心雲稜ルート	宮浦、平野 木戸、大山
5、1～ 4	北ア 赤岩尾根～爺ヶ岳～赤沢山～針ノ木岳 ～七倉尾根	宮浦, 岡村、中島、大村、中館
5、10～11	丹沢 広沢寺（ゲレンデ）	宮浦、平野、中島、大村、ジョン 塚田
5、31～ 1	御坂 三ッ峠（ゲレンデ）	宮浦、平野、塚田、岡村、中島
6、22	丹沢 四十八瀬川 小草平沢～大倉尾根 （新人歓迎山行）	宮浦、西原、木戸、伊藤、塚田、 清水、大山、平野、岡村、中島、 大村、中館、瀬川、斎藤
7、19～21	谷川岳 一ノ倉沢 二ルンゼ 烏帽子奥壁凹状岩壁	西原、中島 大森、平野 宮浦、塚田、山口、大山
8、2～ 3	谷川岳 一ノ倉沢 衝立岩正面壁 雲稜第一ルート ～北稜（下降）	宮浦、大山、平野、木戸
8、31	谷川岳 一ノ倉沢 烏帽子奥壁ダイレクトルート ～南稜（下降）	宮浦、木戸
10、11	谷川岳 一ノ倉沢 烏帽子奥壁南稜フランケ（悪天敗退）	宮浦、大山
12、13～14	八ヶ岳集中	
13	大同心 正面右フェース	木戸、大山
13	阿弥陀南稜	塚田、岡村、瀬川
13	硫黄岳往復	宮浦、伊藤 JR、ジョン
14	大同心南稜ドーム	木戸、大山
14	赤岳西壁石尊稜	塚田、岡村、瀬川
14	地蔵尾根～赤岳～文三郎尾根	宮浦、伊藤 JR

山行報告９８ **９８年２月～９９年 １月**

2、22	奥多摩 越沢バットレス（ゲレンデ）	宮浦、大山
4、4～ 5	谷川岳 マチガ沢（雪上訓練）	宮浦、西原、塚田、大山 木戸、平野、中島、瀬川
5、10	丹沢 広沢寺（ゲレンデ）	宮浦、塚田

5、16	奥多摩 越沢バットレス（ゲレンデ）	宮浦、塚田
5、31	奥秩父 小川山	宮浦、塚田、木戸、大山
6、28	三浦半島 鷹取山（救助講習）	宮浦、西原、塚田、木戸、大山、中島、瀬川
11、22～23	奥多摩 金比羅尾根～大岳山・つづら岩（ゲレンデ）	宮浦、木戸
1、23	御坂 大幡川 四十八滝沢（氷）	宮浦、伊藤、ジョン

山行報告９９　　**９９年２月～２０００年 １月**

2、7	奥秩父 笛吹川 東沢 乙女ノ沢(大滝 1P まで)	大山、宮浦、ジョン、瀬川
2、28	奥多摩 越沢バットレス(ゲレンデ)	木戸、宮浦、大山、ジョン 瀬川
4、3～ 4	伊豆 湯河原幕岩	大山、木戸、塚田、宮浦 ジョン、渋谷
5、2～ 4	御坂 三ッ峠 屏風岩(ゲレンデ)	大山、宮浦、伊藤(英)、岡村 中島、渋谷
11、28	奥多摩 越沢バットレス(ゲレンデ)	宮浦、瀬川

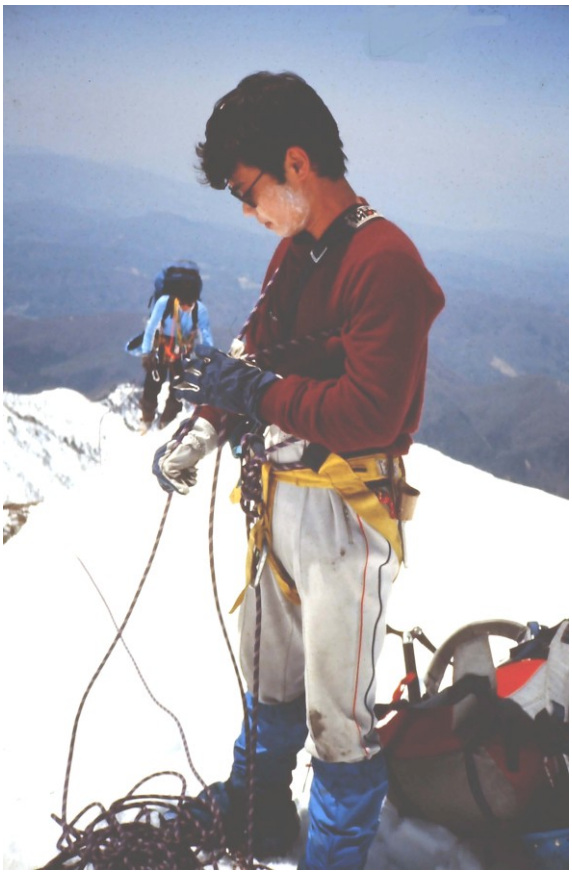
資料

朝霧通信　山行記録(川内)　山口秀男 山行記録　1971～1999 年間 山行報告書
朝霧　山行報告 85’86’87’88’89’90’91’92’93’94’95’96’97’98’99’
宮浦 監修の報告書 1997.春 朝霧通信　1997.夏・秋 朝霧通信　1997.記録　朝霧通信

思い出の山　Ⅰ

春合宿　89､4､29～5､3　北ア　爺ヶ岳 東尾根～鹿島槍ヶ岳～牛首尾根　　塚田､宮浦､小島

鹿島集落の狩野氏宅前より爺ヶ岳東尾根に取り付く､最初から急登で汗をかく｡尾根に出ると残雪が輝き素晴らしく､北アの山々が私達の疲れを癒してくれる｡1800m 付近で長い昼食を取ると重い腰を上げるのが面倒になり 、2000m 付近で初日の行動を早々と打ち切りツェルトを張る。翌朝、爺ヶ岳北稜へは急な小冷沢を下降する。北稜末端は壁になっているので暖斜面を選び稜線にでる。両側がスッパリ切れたスノーリッジで足元は不安定で緊張する｡また重荷も手伝いザイルは出しっぱなしで時間を食うばかりであった｡爺ヶ岳北稜(2631m)からはトレースもあり本日の泊場、冷池山荘に向かう。翌朝はガスって風も強いので鹿島槍ヶ岳北壁はパス！！。鹿島槍南峰(2890m)から牛首尾根を下る。牛首山(2302m)を過ぎるとガスは晴れ、見晴らしも良くなる。牛首尾根の下降は皆初めてで頻繁に地図を見つつ下降するが、途中からのトレースをこのコースであると思い下る。このコースは 2061m からの左の支稜でこれが十字狭に向かうルートと判明したのは大分下った所であった。３日目は支稜を引き返す途中でツェルトを張る。翌日、2061m 峰まで戻り、今度は右の尾根を下降する。黒部谷まであと高度差 500m 付近で黒四ダム工事関係の作郎谷宿泊所に下り立つ。更にブッシュのうるさい急斜面を降りると下が壁となり懸垂して降りるにもブッシュで下の見通しがきかない、とりあえず、作郎谷宿泊所へ登り返す、2061m からの下りをまたしても間違えたことになる。２度も間違え再び登り返す気力もない。４日目の夜はこの宿泊所で酒を買い、反省会を行うが疲れのためかそのショックか十分反省も出来ないまま皆寝込んでしまう。次の日、皆で話合い、ここから下山することにする。黒部の秘境から帰路を工事専用トンネルを利用させてもらい観光客で賑わう黒四ダム駅に車で着いたのはツェルトをただんで 30 分後のことであった。



宮浦さんの思い出

89 年 8 月 11 日～15 日 北ア 穂高 滝谷（夏合宿）

宮浦さんと二人で初日に先に入り滝谷ドーム北壁を登攀した後、北穂の幕場で後発の鈴木君と会う約束だった。滝谷を目指し、二人で北穂の小屋を目指し尾根を登っている途中、小屋手前数１０ｍのガレ場にさしかかった時のことである。前を行く女子大生のワンダーフォーゲルの一人が何かのはずみでザックを落としガレ場の下に転がってしまい、グループが大騒ぎになっていた。ザイルも持たず、どう見ても危なげに見える学生がガレ場を降りて行こうとする。これは二重事故になってしまうとの事で宮浦さんが素早くザイルを出し（ザイルを出したかどうか記憶は確かではない）ザックを取りに行ってくれた。私は、女子大生に「大丈夫だからね」と話をして一緒にお留守番。帰ってきてから何事もない表情でさり気なくザックを渡していた宮浦さん。確か山岳会名も名前も知らせなかったと思う。下心は一切感じられず格好良かったよ。女子大生と別れてから私に言った一言が余分。「清水さ、あの子達に危険だから動かないで待っていてねって言っていたけれど先輩風吹かしていたよ」確かにえらそうだったかもしれないけれど、二重事故を防ぎたかったから私が出来るベストを尽くしたのだけれど・・・

勿論、宮浦さんはその後アブミの苦手な私を上手にリードして滝谷ドーム北壁を無事登攀、お疲れ様でした。夕方鈴木君と北穂の幕場で会えて計画は予定通り。夜、星がとても綺麗だった事と宮浦さんのお陰で充実した 1 日であったことが思い出である。

89 年 11 月 3 日～5 日　北ア 遠見尾根～五竜岳～鹿島槍ヶ岳～赤沢尾根

確か初冬の後立に行きたいと騒いで、塚田さんと宮浦さんが仕方なく軟弱な私を連れて行ってくれたのだと思う。途中の事は、覚えていないのだが多分ペースが遅く二人の先輩にご迷惑を掛けていたと思う。鹿島槍ヶ岳のピークに立った時「先輩達から清水が行くから鹿島槍のピーク手前で絶対敗退すると言われたけれどちゃんと超えたよな」と二人が握手をして言葉を交わしていた事を今でも覚えている。男の友情を感じた一瞬であった。私のわがままを聞いてくれてありがとうございました。お世話になりました。

90 年 12 月 23 日～24 日　八ヶ岳 阿弥陀岳 南稜

よく山に行く伊藤は、仕事が忙しいと言う事でこの時は山には行かなかった。「本当に仕事？」と少し話題になっていたが、後でこの時期はイベントの仕事が入る事を知った。

多分、林さんと二人で山に行こうと話をしていたのを聞いて宮浦さんが心配して参加してくれたのか、最初から 3 人で行こうと話しだったのかよく覚えていない。何時ものごとくペースが遅く二人にご迷惑を掛けたと思う。このルートの思い出は、南稜の上部で少し凍っていて危ない所がある。勿論技術がある人には大した事ではないのだと思うが・・・！林さんがビレーをしてくれて私がリードをした。登れる自信がないから「落ちてもいい？」と聞いたら「絶対だめ、危険だから！」と言われ必死で登る。後で聞いたら「そう言わないと登れないでしょ」と言われさすがと納得する。宮浦さんは、どうしていたかというと平然とノーザイルで私の横を登っていた。当たり前の事だが技術の差を見せ付けられる。お年頃 3 人のクリスマス珍山行、でもとても楽しい思い出である。

93 年 9 月 23 日　奥多摩 天狗岩（ゲレンデ）

合宿制で短期に自動車免許を取った宮浦さん、車が運転したくてたまらない。運転を代わりたがるので代わったが取り立てという事と帰りで疲れていたのか不安を感じ代わろうとする。ムキになって目を真ん丸くして「大丈夫、代わらない」と言って素足になって運転していた。思わず心の中でヤンチャと感じたが黙っている。

ゲレンデから降りて来た時、清水を汲もうと誘われ清水を汲む。汲んでいる最中に「清水を汲んで行って、お母さんにコーヒーの一杯くらい入れてやれよ。たまには、喜ばしてあげないと」と話してくれた優しい宮浦さんの眼差しを今でも覚えている。きっと宮浦さん自身お母さんのことを離れているからこそより大切に思っていたのだと思う。　ゲレンデでどのルートを登攀したか記憶にはもう無いが、宮浦さんのオチャメな面と優しさを感じた山行であった。

伊藤（旧姓清水）久江 記

94、1、22　　御坂 三ッ峠 大幡川 四十八滝沢　　宮浦、松山、林、(伊藤)

二回目の四十八滝である。幕営道具は大月駅のコインロッカーへ預け、富士急へ。9 時にタクシーを降り登山靴に履き替え林道をしばらく歩く。他の三人について行けない。今回は友人の会の新人の氷リード練習である。核心の大滝は凍っていなくて巻いた。第二の核心は松山さんがリード、そしてミッテル２人はプルージクで上がろうとのことになった。が、末端を固定していなかったザイルは、あれよあれよと言う間に引き上げられランニングビレーのみが残った。結局伊藤さんはノーザイルで、わたしは宮浦さんがザイルを出してくれアンザイレンして登った。ここですったもんだしている間に単独で来ていた人を延々待たせてしまった。ラストのわたしがトラバースし始めると、すぐ後ろにべったりとついて来る。このトラバースが核心で、余裕の無いところで横から話しかけられるのには参った。14 時ごろ最後の滝を通過し、今回も本谷を最後まで詰めることば出来ず、右側の枝沢の右尾根に取り付くこととなってしまった。この尾根が急で長くさらに休みが無いので疲れ切ってしまった。もう少しでしゃりばてになる所であった。三ッ峠頂上では林を除く他の 3 人はカップラーメンを作り、わたしは、行動食にひもじくラーメンの汁だけを分けてもらうという状況であった。16：20 山頂発、だんだん暗くなる、18 時、満月の中をダルマ石着。19 時頃三ツ峠駅であった。

94、1、23　　奥秩父　笛吹川 東沢 乙女の沢

伊藤さんとは 22 日に大月駅で別れ、3 人は塩山駅に向かった。そのままタクシーで西沢渓谷まで入ってしまおうかと思ったが、待合室に暖かく泊まることにした。またしても荷物はコインロッカーで軽量化。5：50 塩山駅発。大学生二人と相乗りした。6：30 西沢山荘前から出発。7：20 鶏冠谷出合で川が凍っておらず数パーティがトラップされていた。わたしたちも巻道はないかとうろうろ、結局アイゼンを履いて割れるかも知れなそうな氷の上を飛んで渡った。またアイゼンを脱いで歩き始める、ここで少し時間をロスしてしまった。乙女の沢出合 9：15 着。単独の人一人、乗り合わせた大学生パーティ、3 番目がわたしたちの番である。9：30 予定通り登り始め。宮浦トップ。出合の滝は 1 ピッチぎりぎりである。左側の木でビレー。その後はザイルを引きずって歩く。沢が右に曲がり出した所で再びビレー。わたしとしては出合の滝だけ登れればよかったので日が暮れる前に帰りたい。でも松山さんは、2 週間前に同期の新人がここを残業で登っているので、大滝まで絶対登る気でいる。途中の滝は下を水が流れ、バイルを刺すと噴水のように水が噴き出す。水を飲むには丁度いい。おいしかった。大滝下 13 時。大学生はどうしようかと思案している。先に取り付かせてもらった。滝は 80m で途中でビレーとなる。14：15 中間点。アイスハーケンの数がないので宮浦はほとんどランニングビレーを取らずに進んだ。安定した登りである。中間点で大学生のトップからハーケンを借り最終ピッチ終了。少し休んで 15：30 下降開始、わたしたちは右岸から大学生は左岸から樹林帯を懸垂下降。3 人なのと途中ザイルが回収出来ず登り返したりと大学生に大分遅れを取ってしまった。大滝の懸垂は 2 ピッチであったが、懸垂をする木にたどり着くまでが悪かった。その下は少し歩いてから懸垂 2 ピッチ、下の 1 ピッチは時間がかかるからと宮浦はクライムダウンであった。出合の滝までは暗くなったが慎重に降りていった。懐電を出し最後の出合の滝の懸垂。事故の無いように注意する。ザイルの回収のことを考えて、登って来た通りではなく、右岸のビレー点から真っすぐに降りる。ここを登り返したら大変だ。最後の林が降りる前にふと支点の木の前を見ると宮浦のバイルが 2 本刺してある。持ち下り料は高いぞ～。ザイルはエバードライのはずなのに針金のように凍っている、引っ掛かって進まなかったのが急にスピードが出たりと暗い中こわい懸垂であった。18 時出合着。19：45 西沢の橋。20：10 西沢山荘着。大学生パーティが待っていてくれ、またも相乗りして塩山へ。21：31 車中の人となった。

林 英子 記

1994.3.19～20　谷川岳 一ノ倉沢 滝沢リッジ　　宮浦、伊藤(英)、山口

冬の一ノ倉沢のリッジ登攀の代表は、一ノ倉沢から国境稜線まで一直線に聳え立つ滝沢リッジである。冬山の総合力を問われる、内容の濃いクライミングを約束してくれる。今回朝霧をリードする宮浦と、冬山同行三回目となる伊藤（英）を誘った。

3/19　晴れ－2℃
センターを 4:00 時に出発する。天気もまあまあである。一ノ倉沢出会いで休憩して、まだ暗い中一ノ倉沢に入り、滝沢リッジ末端から 2 ピッチ位上流に登った処を取り付きとする。先行に 2 パーティがいて登攀開始は 7 時 30 分。トップは宮浦で左上気味にザイルを伸ばす。このピッチは下が逆層の岩に雪が乗っていて大部分が不安定な雪壁となっている。Ⅳ、A0。2 ピッチ目からⅢ級位の急傾斜ブッシュ帯になり、6 ピッチ目迄ぐんぐん高度を稼ぐが、太陽が出てきて暑い。所々出てくる岩場は結構悪い。左方の灌木帯に吉尾さんパーティがテントにいたので挨拶する。右の方に目を移すと、烏帽子沢奥壁、衝立岩共に余り雪を付けていないが素晴らしい眺めだ。ここまでの登り方はトップがザイルを延したら、後の二人は同時に行動して時間を短縮した。7、8 ピッチ目はフェースと壁で、ホールドも無く結構難しい。ワンポイントの A0 で越えおむすび岩の上に出る。やさしい雪稜となり、ホルンピークを過ぎ、9～11 ピッチ目はやさしい雪稜だがランニングビレーは余り取れない。両サイドはスッパリ切れ落ち高度感が素晴らしい。もう夕方で先行パーティは岩稜基部に固まっているので、我々も雪稜を削りツェルトを張る。P1 と思われる。落ちたら終わりなので、各自アイゼンだけ外し、ブッシュからビレーを取りシュラフに入る。

（センター発 4:00　一ノ倉沢出合 4:54～5:17　取付 6:09～7:30　おむすび岩 13:00 幕営（P1）18:15　就寝 22:00）

3/20　薄曇り
先行パーティがもたもたしているので,我々の登り開始も 7 時 40 分になった。12 ピッチ目、P2 を越え P3 に到着。13 ピッチ目。ここは通常滝沢側を人口で回り込んで越す。17 年前の前回 3 人で来て、一人がアブミ上で振られ指を骨折した処である。（彼はその後左手首にユマールを取り付け、片手で完登した。）今回は左の垂直の草付をダブルアックスで越えるが、ランニングビレイも取れなく、高度感も抜群で緊張させられた。さらに 14～17 ピッチ目はナイフリッジや雪の壁がドームの基部へ続く。滝沢リッジのハイライト部分で美しい。ドーム基部下までの 18～20 ピッチ目は確実なビレーは取れない。一人が落ちたら、反対側に飛び込む覚悟をしなければならないピッチだ。ドーム基部からは足元がスッパリ切れ落ちた斜面を 2 ピッチトラバースして、A ルンゼの下降点に着く。「前回はここからトラバースをしたんだっけ！」と思い出しながら A ルンゼに降り、雪崩を気にしながらスピードを上げ、稜線に 30 分位で到着。3 人でガッチリ、ニッコリ握手。22 ピッチの充実した登りだった。今回、二人にルートの指示はあえてしなかった。トップもドームの基部回り込み 2 ピッチだけさせてもらい、殆どを二人で交互に行っていた。冬山のテクニックもスピードも申し分なかった。

（起床 5:00　出発 7:40　ドーム基部 12:40　下降点 13:40　稜線 14:12　肩の小屋 14:30～15:05　センター16:47）

山口 秀男 記

1994.4/29～5/3 剣岳　八ツ峰主稜　　宮浦、木戸、山口

前年GW、宮浦と八ツ峰を計画したが、Ⅰ峰で丸一日半大雨に打たれ、ツェルトの中の靴の中に水溜りが出来る位になるわ、当然衣類、シュラフも全てが水浸しとなってしまった。夜中に我慢できず、ツェルトの底の合わせ目を広げ、おしっこをして宮浦に怒られるわで、ほうほうの体でⅠ、Ⅱ峰間ルンゼから下山した。八ツ峰主稜は高度差、登高距離、積雪量でも、大いに楽しませてくれる。今回はリベンジ＋穂高まで！という計画になった。

4/29 晴れ後雨

前夜、急行アルプスで新宿を立ち、信濃大町～扇沢と乗り継ぎ、黒四ダムに着いた。GWとあって、登山者、観光客で人盛りだ。気温7℃。ダムから黒部川に降りると釣り人もいる。雪渓の上を内蔵助谷迄下り、左折してハシゴ段乗越しに向かう。天気も良い。丸山東壁基部を回り込み、内蔵助平からハシゴ段乗越しまで登り、八ツ峰Ⅰ峰Ⅲ稜対岸には2時前に到着し幕営をする。

(信濃大町 5:05　扇沢 7:30　黒四ダム 7:45～8:25　内蔵助谷 9:22～9:40　内蔵助平 11:20～12:00　　ハシゴ段 13:06～13:28　八ツ峰三稜 13:50　　幕営 14:40)

4/30 晴れ後雪

6時前にⅢ稜末端に取り付いた。P1へは左のスベリ台ルンゼから大きく巻く。急斜面の雪壁の連続で楽しい。P3からはナイフエッジ、岩稜がP5迄続き、その後傾斜が落ちた雪稜と斜面を登る。すぐに四稜とのJPなる。間もなくⅠ峰となってここからが主稜となる。宮浦と昨年の苦い思い出をしばし語り合う。Ⅰ峰、Ⅱ峰の下りは雪壁のクライムダウン。Ⅲ峰の登りはノーザイルで、下りは懸垂下降。宮浦、木戸共体調は良いし、技術も有るので必要と思われる以外ザイルは付けない。Ⅳ峰へはやせ尾根を登り、ピークからは三ノ窓側へ懸垂下降。やせ細ったナイフリッジからⅤ峰へ。剣の稜線、源治郎尾根が素晴らしい。Ⅴ、Ⅵのコルへの下降はニードルの先端に有り、長次郎谷側を2ピッチの下降。コルでは3パーティが幕営していた。ここからは八ツ峰上半部となる。コルからは三ノ窓谷側の短い岩場と急雪壁を登る。急雪壁が続き、隠れたクレバスも有るので気が抜けない。手前ピークをクライムダウンしてⅥ峰に出る。Ⅵ峰から振り返り見るⅤ峰は迫力満点だ。Ⅵ峰から懸垂下降してⅦ峰に向かうが、左はスッパリ切れ落ち気合いが入る。三の7窓側の長い雪稜を登るが狭く、アイゼンのダンゴと引っ掛けには十分注意が必要だ。上部は胸を突くような登り。Ⅶ峰からのからは高度感満点のクライムダウンだがラストは落ちれない。最後の八ツ峰の頭へは右手にトラバースし急なガリーに取り付く。夕方八ツ峰の頭直下に着き幕営する。

(起床 3:40　三稜取付 5:45　P1下 6:43～7:02　1峰 10:30～10:50　3峰 12:10～12:30 5,6のコル 14:20　八ツ峰の頭 16:20　消灯 20:00)

5/1: **風雪** 風雨で停滞。
5/2: 風雨 濃霧で停滞。昨年の雨がトラウマになり、今日も停滞となり、穂高岳までは中止とする。
5/3: ３時に起床し、剣岳本峰を経て、早月尾根を下り、富山～長岡～水上を経由して帰宅の途についた。

山口 秀男 記

1997､8、2～ 3　谷川岳　一ノ倉沢　衝立岩正面壁　雲稜第一ルート～北稜（下降）

宮浦、大山、木戸

夜半過ぎ数時間後の登攀を控えビールの飲みすぎでグルグルの腹を押さえながら､行くべきか留まるべきか一人逡巡していた。明け方ようやく腹がおさまると腹も決まり行くことにした。やはり伝統ある難ルートに終始セカンドで行けるという好機を逃す手はない。4時半快晴、雲稜第二のパーティ(塚田、平野)と共に出合い出発。陽射しは日の出とともに強くなる。中央稜末端をトラバースし六時半、雲稜第一登攀開始(大山終始リード)。我々３人のすぐ後に雲稜第二パーティーも登攀開始。二ピッチ目は顕著な張り出しの第一ハングのピッチだ。すっ飛んだボルトのリングのかわりに巻き付けた細引きがゆらゆらゆれているのをみると緊張する。トップはハング下のあぶみトラバースを難無くこなしスムーズにハングを乗っ越したが三人がビレイポイントに集結するまで二時間程かかった。その次は最近ピンが５、６本飛び、そのままだといういわく付きのピッチ。どのピンも古くて遠い。しかも所々出てくるトラバースぎみのフリーは信用ならないおおまかなフレークの安定度を一つ一つ確かめながらの嫌なものだった。そんな中、トップはところどころあぶみの最上段に乗って身体を伸ばし、ハーケンを打ち足しながら登ったのだがらいやはやものである。すぐ隣では平野が雲稜第二の大ハングをじわじわと攻撃している。お互い声を掛け合いながら登る。ここまで来ると凄い高度感だ。やむ終えず小さな浮き石を投げたが、それは長いこと落下して、銃声のような鋭い響きを残し、衝立スラブで砕け散った。まもなく正午を越え、雲行きが怪しくなりはじめた。雨が降らないことをただ祈るばかり、続く４ピッチ目のトップが視界から隠れたあたりで突然｢うわあっ！｣と叫んだので思わずザイルを握る手に力が入った。両手で大きな浮きフレ-クを抱えたまま身動きが取れなくなったらしい。彼はどうにかこうにかそれを壁にはめ直し、事無きを得たが、冷や汗ものである。我々の受難はまもなく雷鳴と共にやってきた。はじめそれは雪渓の崩壊音かと思われたが、やがて｢からからから｣に変わる。周囲が暗くなり雨が降り始めた。第三ハング手前で堰を切ったように豪雨となった。

ついさっきまで乾いていた二ノ沢、滝沢スラブ、本谷、２ルンゼ等は数分で音をたてて下る白い濁流の筋と化した。雷鳴が耳をつんざき、くっきりとした稲妻が沢やルンゼに落ちる。一ノ倉沢は豹変した。トップの格闘ぶりは雨に遮られてはっきり見えないがセカンドの二人はただ声を張り上げ｢がんばれええいっ｣と何度も叫んだ。トップが断念すれば我々はただペンギンのように立ったままうなだれて雨を耐えしのぎ、一夜を過ごすことになりかねない。ボサテラスからトップの｢解除おおっ｣の声に一安心した。さらに半ピッチ、ブッシュに入り３人がどうにか横に腰掛けられるテラスでビバークに決めた。宮浦さんが持参したシュラフカバーを気前よく割いてくれたのでハーケンに固定し小さなひさしを作った。雨は弱くなったが日が暮れても降りやまず、びしょ濡れで震えながら遠い夜明けを待った。さっきまで勇敢だったトップが野良猫のように身を摺り寄せてきた。眠らずただ震えているのも手持ちぶささで苦痛だったので１時間ごとに行動食を一口ずつ分け合って食べ、奇声を上げて気合を入れた。ようやく雨が上がり彼方の空が白みはじめ暫くしてやわらかな日の光が我々の元に回ってくると新たな力が少しずつみなぎってきた。7時過ぎ行動再開。暖かな陽射しの中を晴れやかな気持ちで洞穴ハングを越え、１０時頃衝立の頭に立った。皆腹が減っていたのですぐ下降に移るが、その間天気は再び天気は急変。雲が急速に頭上に覆い、コップスラブに下り立った正午前、またもや雨が降り始める。くわばらくわばら。出合までそそくさと退散した。

木戸　伸一 記

〇〇㍍台地（16：20）

五日　夜半に雨がやんで天気がよくなったため、急激に寒くなる。朝ツェルトをたたんでいる間に、濡れた服はバリバリと凍り始めた。しかし歩き出して二、三のピークを登降する頃には乾いてきて、雪渓もぬかるみ始めていた。鹿島集落へ最後の急坂を下降すると、牧歌的な景色の緑が目にまぶしかった。

〔コースタイム〕東尾根二〇〇〇㍍台地（6：35）鹿島集落（8：40）

登攀を終えて

主眼であった鹿島槍北壁は、悪天のため残念ながら今回も手つかずに終わった。キレット付近から眺めた北壁は、雨のため頂稜まではガスって見えないものの、急傾斜で一気にカクネ里へ落ちていた。登攀欲をかきたてる威圧的な景観である。多くのクライマーが憧れるだけのことはある。

今回は急拠ルートを変更して登ったGVだが、北壁にひけをとらない登攀内容があったと思う。それにしてもキレット小屋までの縦走路は長くつらかった。

不帰～五竜の継続は、天気さえよければ中級者でも充分楽しく、手ごたえのある登攀を味わえるだろう。事前に各ルートをメンバーの誰かが一度はトレースしておけば申し分ない。とはいっても雪稜登攀ゆえ、中途からの退却は登るより難しいことを念頭において取りつきたい。

今回アプローチに選んだ傾斜の緩やかな不帰沢でさえ、当日の夕刻には大雪崩が発生し、われわれのトレールはすべて雪の下になってしまった。残雪期とはいえ、雪山の恐ろしさを見た思いがする。

最近はわが会でも、今回のように一つの山域で継続を行うよりも、本番ルートを登った後、小川山でフリーを楽しんだり、登攀のあと山スキーでトレースをのばすなど、長期間の休暇をフルに活用し、様ざまな興味を網羅するような意欲的な山行が増えている。後立山で二本の雪稜を登りついで縦走するスタイルはもう古いのかもしれない。

長年東京朝霧山岳会の先輩たちが通いつめた後立山の魅力は、その山域を存分に歩いてこそわかるものが多い。そしてベースキャンプ方式でバリエーションを登るより、全装備をかついで尾根から尾根へとわたり歩くスタイルがやはり私は好きである。

五竜ＧＶ、上部ミックス壁核心部の登攀

〔装備一覧〕

◇共同装備

ツェルト二～三人用　一張り
ツェルト二人用（予備）　一張り
9㍉×45㍍ザイル　二本
カラビナ、シュリンゲ　各十五個
ハーケン（薄、厚、アングル）　七枚

◇個人装備

ピッケル、バイル、アイゼン、アブミ、ゼルプストバンド他

〔食糧〕

朝＝ラーメン＋モチ一個
夕＝ジフィーズ＋ミソ汁
行動食＝各自若干
飲み物＝紅茶十二袋、緑茶五袋、コーヒー五袋、酒なし

五日間とも同じメニュー。継続であるため食糧は少なめにした。

岳人　1989 年 5 月号

22～25ページは25→24→23→22の順にお読みください。

五竜東面の「G」のつく壁、雪稜が高くなってくる。

本流のデブリを横切り、GⅢ稜の枝尾根をトラバースして大雪渓のC沢に入る。陽が当たり、時たま落ちてくる落石に注意しつつうんざりするほどの登りで谷をつめて行く。

GVに食い込むルンゼに入ると、俄然傾斜が増し、雪渓の亀裂に注意しながら足を運ぶ。雪渓がくびれている所でザイルを結び、いよいよGVの登攀になる。

最初は容易な雪壁を三〇㍍登り、いったん左の稜上に出る。再び右に戻り、雪のない急な草付ルンゼにピッケルを突きつつ進むと、上部に広がりのある雪田下に着く。

広い雪田にザイルを伸ばす。ルートはD沢側を巻いていくが、雪面にはいたる所亀裂が走っており、見た目より神経をつかう。雪の段差を前にしてザイルを付ける。

ハイマツが出ている傾斜の強い雪壁は強引に直上する。C沢側はスッパリ切れ落ちて高度感満点のピッチだった。

その後、右に走る雪の割れ目にそってトラバースし、キノコ雪の庇下でビレイする。この先はキノコ雪や雪庇に阻まれているため、右隅からキノコ雪を回り込むように行くが、いまにも頭上の庇が崩れそうな所だ。

やがてジャンクションという平らな雪のテラスに着く。ここからが核心部で、問題は上部ミックス壁だ。

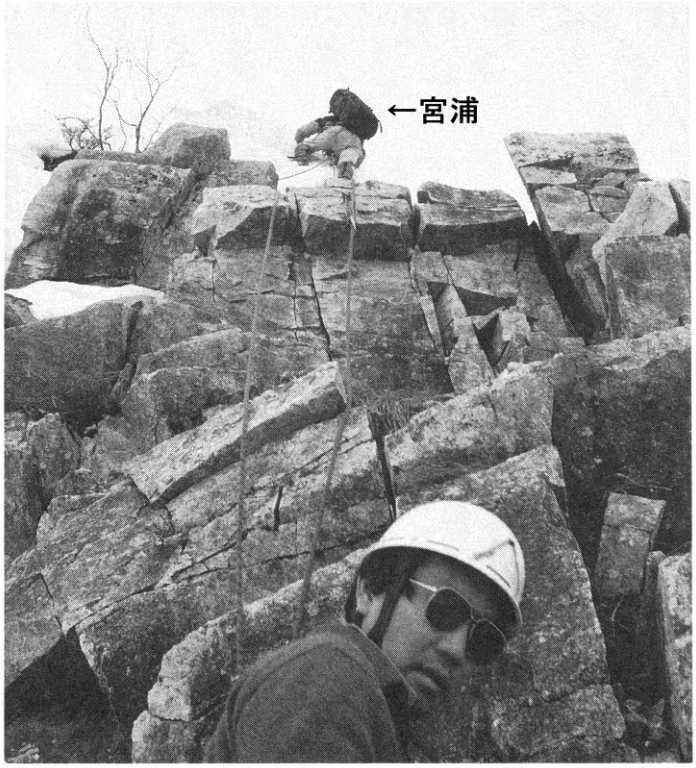
正面の雪壁は傾斜も強く、雪も不安定だ。まず雪壁から登り始め、その上でボロボロの岩に、利いていないハーケンを打ちながら直上する。右のルンゼに入る前に、逆層の岩にハーケンを打ってトラバースするが、雪は不安定で悪い。その上部は急な雪壁で、上部からの落氷に注意しながら登り、ハイマツでビレイをとった。

ハイマツから垂れ下がる氷柱を右に回り込むようにしてハイマツ帯を右上すると、上部に崩れそうな雪柱が伸びている。アイゼンを静かに蹴り込んで身体を上げていくが、ザイルがハイマツの間をくぐっているため流れが極端に悪い。その上部でいくらか急な雪面に出た。五㍍の露岩にハーケンを打ってビレイする。

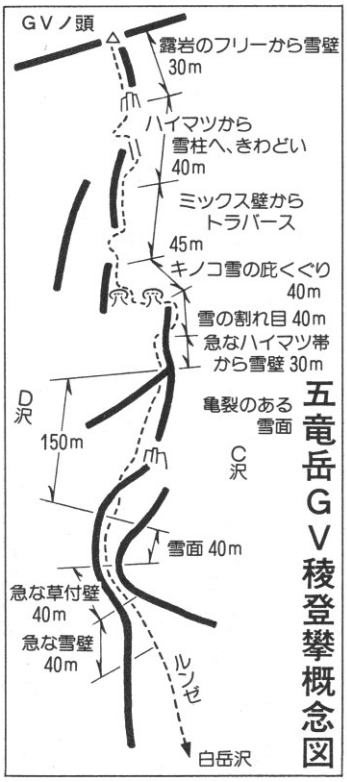
この頃から雪が舞い始めた。最後の雪面を登り縦走路上の鎖の上にビレイをとる。

きょうはキレット小屋まで、ということで縦走路をひたすら歩く。起伏の多い道に「いいかげんにしろ！」と怒鳴りたくなる頃、ヘッド・ランプの明かりの中にキレット小屋が見えた。

〔コースタイム〕五竜山荘（5：15）GV取付（7：30）GVノ頭（16：55）キレット小屋（19：40）



不帰Ⅰ峰主稜、断壁上の登攀



雨に打たれて鹿島槍から爺ケ岳東尾根へ

四日　朝から雨である。きのうの疲れもあり停滞したかったが、きょうは縦走路を南へ向かってひたすら歩くだけなので出発する。

降雨の中、キレットを越えるが、雪の縦走路はいたる所で崩壊している。懸垂下降をまじえて通過し、鹿島槍の登りでは横なぐりの雨にたたかれ、身体の上から下までぐっしょりと濡れる。

鹿島槍のピークには悪天にもかかわらず、ハイカーがひしめいていた。山頂から冷池山荘への下りは雪も所どころしか残っておらず、気楽に歩けた。さらに爺ケ岳まで雪のない縦走路を進み、爺ケ岳本峰から長大な東尾根を下る。

下り始めに少々傾斜はあるものの、広い尾根ゆえ下降は楽だ。二〇〇〇㍍台地を通過するあたりから再び雨が降り始め、木の根っ子に寄り添うようにツェルトを張った。

〔コースタイム〕キレット小屋（8：00）鹿島槍山頂（11：00）冷池山荘（12：30）爺ケ岳本峰（14：50）東尾根二〇

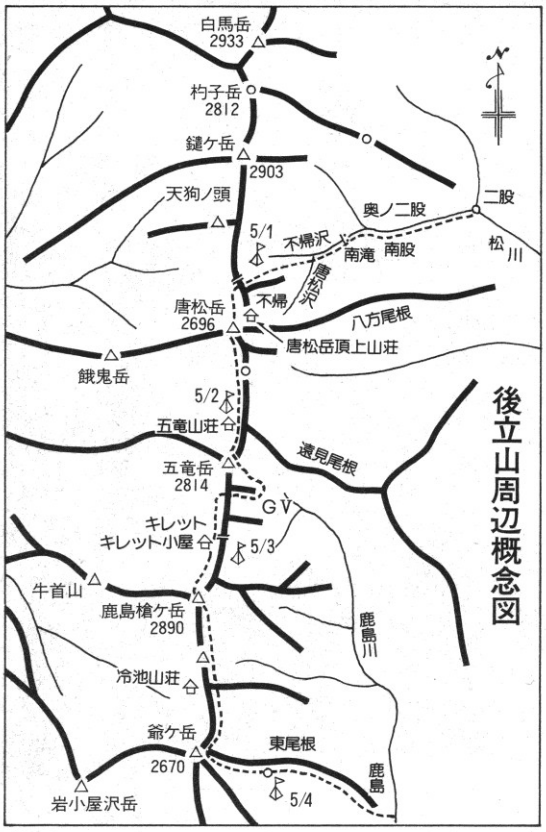
22～25ページは25→24→23→22の順にお読みください。

口秀男（三七）、宮浦達也（二八）

五月一日　白馬大雪渓入り口の猿倉手前、二股から残雪が目立つ南股に入る。二股から遠望する不帰は鋭角的な景観で聳え立つ。ここから高度差一八〇〇㍍上に目指す不帰Ⅰ峰がある。途中、東股発電所を見送ると奥ノ二股となり、杓子岳から落ちる沢が流入する。

この先、両岸が狭まり雪渓の急登が始まると、ほどなくして雪渓を割る形で南滝が水しぶきをあげている。威圧的だ。ここは右岸の雪壁にステップを切って慎重に登り、トラバース気味に滝の落ち口に立つ。

谷が右に大きく折れると、穂高の涸沢カールを思い出すような広い雪原が開け、目指す不帰Ⅰ峰主稜の末端が裾を広げている。その雪原を二分するように右に不帰沢、左に八方尾根から落ちる唐松沢の雪渓が現れる。



いよいよ主稜登攀のプロローグだ。取付は尾根末端を省略し、少し不帰沢に入りP2・P3のコルに上がるルンゼをつめる。コルに近づくと傾斜もいくらか強くなってくる。ここで「上部が悪く時間切れ」といいながら降りてきたパーティーとすれちがった。

狭いコル上でザイルを結び雪稜を登り始める。ハイマツのうるさい雪稜から胸をつく雪壁を一〇〇㍍ほど登ると「断壁」と呼ばれる垂壁が現れる。

基部のクラックは雪で半ば埋まってはいるものの、フリーでは到底無理なので、アブミの掛け替えでハングを回り込んで乗り越える。

さらにもろい岩場が少々続き、急な雪稜を二ピッチと、ハイマツがうるさい個所を直上すると、丸みのある雪尾根になる。ここから上部はもう悪い所はない。今夜はこの尾根上を平らにし、ツェルトを張ってビバーク。

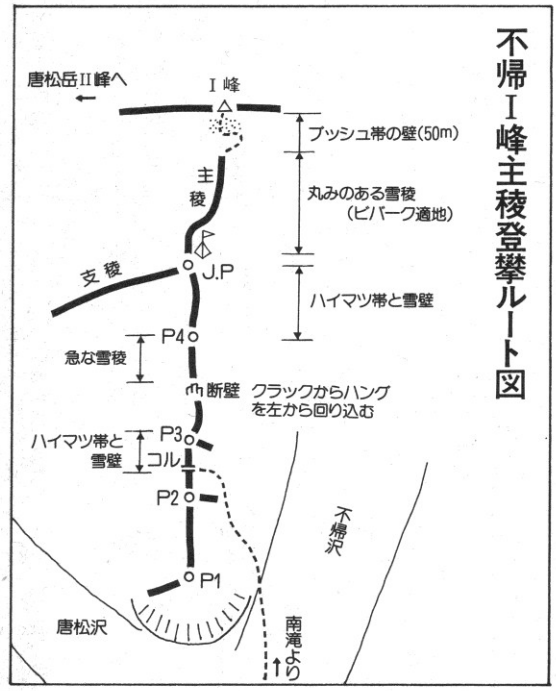
〔コースタイム〕松川二股（5：20）南滝（9：30）P2・P3のコル（10：30）断壁上ビバーク地（17：45）

雨の中、主稜上部を登り五竜山荘へ

二日　ビバーク地から、さらに丸みのある雪稜をたどる。稜線に近づくと雪壁があらわれ、それを乗っ越すころから雨が降り出す。去年は雨で靴下が濡れ、両足が軽い凍傷にかかった。春でも油断は禁物だ。

上部はブッシュ帯で雪はなく、木登りスタイルで途中ピッチを切り、雨に濡れた不帰Ⅰ峰に出た。

唐松岳まで数回の登り返しがあり、ルートも判然とせず、思いのほか時間をくってしまう。それに比べ五竜岳への縦走は天気もいくぶん回復したのでスムーズに歩を進められ、昼過ぎには五竜山荘へ



着いた。

天気予報によると、明日は問題なさそうだが、四日は悪天が予想されるとのこと。今回の目標だった鹿島槍北壁をあっさりあきらめ、五竜岳東面に転進することに決め、早々にツェルトを張る。今回のメンバーのうち二人は異常とも思えるヘビースモーカーで、ヤニでツェルトが汚れるほどだ。

〔コースタイム〕断壁上ビバーク地（6：00）Ⅰ峰頂上（7：45）唐松岳頂上山荘（11：00）五竜山荘（13：55）

五竜GVの登攀は上部のミックス壁がポイント

三日　天気予報どおり雲一つない快晴の朝だ。早々に白岳沢を下る。クラストした斜面にアイゼンが小気味よい。きょうのルートは数年前に登ったことがあるGVである。白岳沢を下りるにしたがい、

22～25ページは25→24→23→22の順にお読みください。

陽春の後立山・二つの雪稜をつなげて
不帰Ⅰ峰主稜～五竜GV継続登攀

春山シーズンの幕開けにふさわしいルートへ挑戦したい。力のそろった仲間と向かったのは、不帰と五竜のバリエーションを結ぶ後立山の縦走だった。全装備を背負った雪稜登攀と稜線歩きは、技術以上に体力が要求される山行だった。

東京朝霧山岳会 *Tokyo Asagiri Sangakukai*

不帰Ⅰ峰主稜、〝断壁〟下の雪稜を登る

たっぷりの雪を求めて 不帰と五竜の雪稜を結ぶ

「合宿どこに決まった?」

山行計画はより詳しく立てることが大切だといわれる。だが、計画だけにあまり力を注ぎ込んでしまうと、おもしろみ、楽しみが失われることがままある。計画性のない私（伊藤）が会のリーダーになってからは、他人から「だらしない」といわれようが、合宿内容は二週間前にやっと決めることにしている。

というのは、ここ一、二年ガンガンと毎週のように登っているメンバーが、合宿直前に自分なりのビッグルートを登り、体力、精神力が一気に備わる可能性があるからだ。数カ月前から計画を立て、それに向かって練習を積むのもよいが、若いメンバーにとっては、合宿直前にルートを決める方が、より現実的で魅力ある合宿になると考えている。

しかし、得てしてこういう山行に限って、登攀は終えたものの稜線に出てからの下降路で迷い、そちらの方が厳しい内容になることがある。これもまた後から思い出せば楽しいことでもあるが――。

今回の計画も、入山数日前に決まり、計画書作成、出発前日に食糧購入と、毎度のパターンのくり返しから始まった。暖冬で雪不足が続くなか、たっぷりと雪が残っている春山はやはり後立山しかない。メンバーはベテランの山口秀男、一ノ倉沢通いが続く若手の宮浦達也、それに伊藤守の三人。三人のいずれかが過去にトレースずみのルートを、継続というスタイルで登ろうと、不帰Ⅰ峰～鹿島槍北壁のプランができあがった。天候に恵まれず、北壁から五竜GVに変更したが、内容的には満足のいくものだった。

今回は麓から全装備を背負ったまま登降することを前提とし、またこのエリアなら「アプローチからトレールはなし」というわれわれの望む条件も満たしているだろう、と思われた。

残雪の南股をつめて 不帰Ⅰ峰主稜〝断壁〟まで

◇**期日**＝一九八八年五月一日～五日
◇**メンバー**＝CL・伊藤守（三四）、山

22～25ページは25→24→23→22の順にお読みください。

Chronicle

日本

上越／頸城

谷川岳

一ノ倉沢〈αルンゼ右凹状スラブ〉

本誌118号別冊『谷川岳ルート図集』にも収録のルートで、一九七七年、RCC神奈川パーティによって登られた。最近の状況を知る意味で、この春の記録を紹介する。八七年5月31日、東京朝霧山岳会の山口秀男(35)、伊藤守(32)、塚田秀美(30)、宮浦達也(25)の四人が登攀した。上部の一枚岩下のルンゼは濡れており、ピトンを打ち足しⅣ、A0で傾斜の強いブッシュに入る。一枚岩は通常、左の脆いフェースを直上してリッジ通しに登るが、フェース上部で右へトラヴァースし、一枚岩の頂点より泥の詰まったルンゼ(Ⅳ+)も登れるとのこと。ルート・ファインディングが楽しめる中級者向きルートで、春は取付までの雪渓の処理が難しい。同パーティは、終了後一ノ倉尾根を下降している。末端まで一〇回ほどの懸垂下降とヤブこぎが続き、下るより一ノ倉岳まで登ったほうが楽だとのこと。

(文中には記載していませんが、一ノ倉尾根でビバーク翌朝 月曜日、皆会社休み水上駅前の店で朝から祝杯をあげた)

岩と雪 1987、12月号

記録速報

北ア・硫黄尾根〜槍ケ岳

一九八九年十二月二十八日〜一九九〇年一月三日◇東京朝霧山岳会◇伊藤守、小嶋豊、宮浦達也、鈴木典仁、伊藤英世(氷河山岳会)→

十二月二十七日　夜、白銀を求めて新宿駅を発つ。

二十八日　六時、大町市郊外の七倉に着く。小屋の主人にお茶をご馳走になる。六時半、めざす硫黄尾根へと向かう。アプローチで半日潰れる。

高瀬ダムを越えて、昼頃湯俣に着く。取付まであと三十分かかる。尾根の末端まで行き、大休止する。ここから登攀開始だ。最初の一時間ほどは樹林帯の中の急登にあえぐ。若干傾斜も落ち、もう少しで森林限界というところで天幕を張る。

二十九日　小雪の舞う中、出発する。樹林帯を抜けると硫黄尾根前衛峰群が現れる。岩峰はP1〜P6まであり、P1は直下二㍍が悪い。P2は下りで二〇㍍の懸垂下降の後、一〇㍍のクライミングダウンを行う。P6から小次郎のコルへ一気に下り、蛇行した尾根を登り返す。

へとへとになって硫黄岳のピークに着くと、前方に硫黄台地が広がっていた。この台地のはずれでビバークする、一四時半。

三十日　核心部の赤岳前衛峰群の通過だ。昨日一緒になった二人組のパーティーと抜きつ抜かれつ前進するが、ザイルを組む部分が多くなると、さすがに五人では時間がかかり、アッという間にぬかれ、間隔も開いてしまった。

P6で一〇㍍のクライミングダウンの後、四〇㍍の懸垂下降に入る。湯俣川側を大きく巻き、P8の肩に達するルンゼを登る。肩から千丈沢側のルンゼを下降すると中山沢のコルだ。ここに着いた頃は暗くなり、猛吹雪となった。

三十一日　吹雪のため停滞。

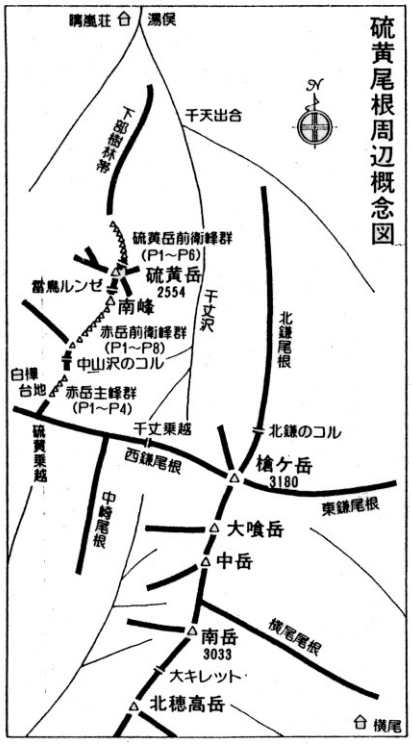
一月一日　平成二年は吹雪で始まる。次の悪場の赤岳主峰群は難しくはないが、気を抜けない。これを越えると白樺台地だ。台地部分は短く、ブッシュのヤセ尾根の通過になる。

西鎌尾根に出るが、残念なことにホワイトアウトで何も見えない。小休止後、槍ケ岳へ向かう。吹雪の西鎌は長く厳しい。槍の肩着、一七時。

二日　気温マイナス一七度。風速は二〇㍍を超えている。視界のきかない最悪の天気だ。その中を千鳥足になりながら南岳に進む。

大喰岳で早くも道を失う。信用のおけない道を進むと、やがて見覚えのある場所に出た。中岳では飛騨側の尾根を下ってしまい、直下の雪壁を気の向くままトラバースするとあっけなく夏道に出た。槍の肩を出て二時間半、やっと横尾尾根の分岐に着く。ここを下るが、ドカ雪のため、トレールが消されてラッセルが辛い。暗くなる頃、横尾に着いた。

岳人１９９０年５月号より



思い出の山　Ⅱ

三ッ峠山屏風岩落石事故報告書

発生日時　　1996 年(平成 8 年)　5 月 19 日（日）　14 時 30 分頃

場　　所　　三ッ峠山　屏風岩　東面フェース　第一クラック終了点テラス

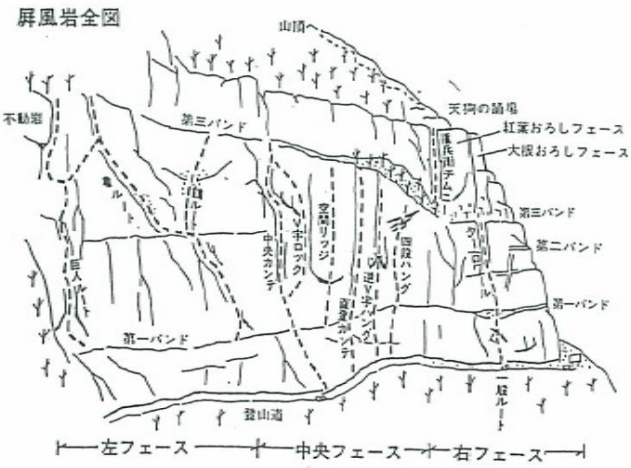
被 災 者　　木戸　伸一（30 才）　（1993 年入会）

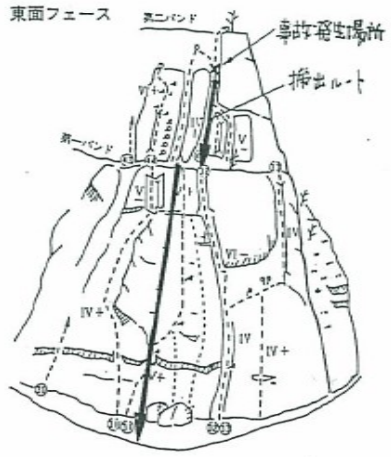
症　　状　　右足 3 個所、左足 1 個所骨折

事故の発生状況

三ッ峠山（1786m）*1 屏風岩で登攀訓練のため**宮浦（34 才）**、平野（31 才）が 5 月 17 日（金）に入山、木戸、大山（31 才）が翌日 18 日（土）に入山そして、塚田（40 才）がその翌日 19 日（日）の朝に入山した。
当日の朝は、木戸、大山、塚田の三人で巨人ルート（90m、Ⅳ+A1）、セストグラディウスルート（20m、Ⅲ、A2）を登攀した。昼からは、同じ三人で地蔵ルート右（20m、Ⅴ、A0）から第一クラック（15m、Ⅳ）そして、紅葉おろし（80m、Ⅵ-）を登ろうと予定していた。
地蔵ルート右を大山がトップで登り、続く第一クラックも大山がトップで登った。その後、木戸、塚田がフォローした。大山がビレーしている、第一クラック終了点のテラスに木戸、塚田が登り着いた。それからは易しい岩場となるので、木戸が左側から、塚田が右側から同時に第二バンドに向かおうとしていた。その時、木戸が手に掛けた岩（約高さ 120cm、幅 60cm）が剥がれ落ちた。剥がれた岩は、木戸を押し倒し、木戸の足爪先に乗り転がって登山道まで落下していった。木戸は、テラスに転倒したものの大山のビレーによって墜落を免れた。木戸は、左足甲に出血がみられたので傷口を消毒し三角巾で傷口を巻いて手当した。木戸が自分で足首をバンダナで締めて止血した。なお、右足の甲は擦傷程度であったので、大型のバンドエイドで手当てした。木戸は、顔色が青白くなり気分が悪いと言って、その場で横になった。木戸は、「岩を引っ張ってしまつた。」と言って悔やんでいた。下の登山道にいた宮浦に、様子を聞きいたところ、他に怪我をした登山者はいないということであった。

注）*1　山梨県南東部、御坂山塊に位置し、富士山の展望台としてよく知られている。





救助の状況

塚田は、登山道にいた宮浦、平野を直ちにテラスまで登ってくるよう指示した。
塚田は、宮浦と協議し、登山道まで木戸を降ろし、四季楽園まで木戸を担いで登山道を登り、楽園のジープで裏登山道下の駐車場まで移送してもらって、そこから平野の自家用車で病院に搬送することとした。
第二バンドの松の木から 45m ザイル 2 本を第一バンドまで垂らし、宮浦が木戸を担いで懸垂下降する。木戸のゼルバンには、ザイルを結び第二バンドの松の木で支点を取り塚田がザイルに制動をかけながら二人を下降させた。第一バンドでは、大山が降りてくる木戸の着地をサポートした。またそこから同様な方法で第一バンドから登山道まで降ろした。登山道で各自の装備を整理し、宮浦が木戸を担いで四季楽園まで登った。楽園のご主人中村氏に駐車場（裏登山口）までジープで運んでもらえるように依頼するとともに救急指定病院である市立富士吉田病院を紹介していただいた。ジープには、平野と大山が同乗し、駐車場からは平野の車で病院に搬

送した。塚田、宮浦は残こした登山装備を回収し駐車場まで運んだ。塚田、宮浦は、病院から戻ってきた(20:00)平野の車で病院に向かった。
怪我の症状と対応
病院でレントゲン診断の結果、右足３個所と左足１個所が骨折していることが判った。
病院から大山が事故の概要と、木戸の症状を緊急連絡先の山口氏に電話で第一報を知らせた。
医師から止血の方法が不適切であることを指摘された。右足が熱をもっているので今晩は、徹底的に冷やすとの話であった。なお、骨折しているものの熱が引けば明日でも退転院は可能であるとのことなので、ここでは、今日一日の入院となった。
転院先は、木戸の住まいである国立市周辺を捜すことにした。再度山口氏に電話をして、病院を西原氏に調べてらうよう依頼した。また、木戸の妹である純子氏に事故の概要と怪我の症状を電話で説明した。宮浦、平野には、翌日の転院の手伝いのため残ってもらい、塚田、大山は富士吉田駅から電車で帰宅した。翌日（20 日）転院先が蓮村整形外科に決まったので宮浦、平野が車で搬送した。蓮村整形外科の再検査の結果、退院まで２ヵ月を要し、リハビリにさらに１ヵ月かかる見込みとのことであった。

反省点と問題点（塚田の個人の見解して）

（１）三ッ峠の屏風岩は、近年風化が著しく、落石が絶えないとの報道があったことは知っていたが、このような大おきな岩が剥がれる（すっぽり抜け落ちる）ことなどは、予想もしていなかった。
（２）木戸が「岩を引っ張ってしまった。」と言っていたが、そのとき木戸は、クレッターシューズではなく、運動靴を履いていた。このためフリクションを得ようして岩を引っ張ってしまったと想像できる。
（３）また、岩が浮いているかのチェックはしなかった。
（４）止血方法が適切ではなかった。（止血をしてはいけなかったか？）
（５）事故者の懸垂下降による搬出方法が適切ではなかった。（問題なく搬出は出来たけれど「山岳救助技術岩場編」の方法とは、違っていた。）

その他

我々のパーティが起こした落石により他の者が事故に遭わなかったことは、不幸中の幸いであったと言える。
木戸には申し訳ないが足の骨折程度で済んだことは、誠に幸運であったと思う。
そして、木戸の怪我が早く治り、現役復帰できることを心から願うばかりである。
また、緊急連絡先の山口氏、西原氏ほか、会のみなさまにご心配をおかけしたことをお詫びいたします。

以上　　（文責：塚田　秀美）

1987、3、8　谷川岳　幽ノ沢 ノコ沢（遭難救助）　伊藤、塚田、宮浦、小嶋、鈴木

３月７日夕刻　東京南稜会３人パーティは幽ノ沢ノコ沢大氷柱を登り上部雪壁の状態が悪いためその場で同ルートを下降中、懸垂時ピンが抜け基部まで150～200m墜落した。連絡は明けて８日朝５時半　一ノ倉沢出合避難小屋に伝えられ当会、他パーティー約10名が２次隊として６時に出発した。幽ノ沢に入ってまもなく先発隊と合流約30名となり先を急いだ小雪も舞っている程度でラッセルも二俣までは楽であったがノコ沢に入り傾斜も増しラッセルもきつくなりいっこうに進まず、また2～3箇所シェルンドがあった。大氷柱がみえるあたりにさしかかった時表層雪崩があったが小規模で全員無事であった。それからまもなく石楠花尾根の斜面にツェルトを発見した。負傷者２名　遺体は沢の中央に置いたとのことだが昨日からの雪でまったくわからなかった　遺体捜索、負傷者搬出のパーティにわけ仕事をはじめた。けがの状況は助骨損傷　他１名は右の腰から足にかけて及び右手首骨折であったが200mも墜落を考えれば軽いのかもしれない。負傷者をスノーボードに載せ潅木を支点に40～80m、５～６回で二俣に降ろした。
幽ノ沢出合からは旧道沿いは雪の斜面を搬出し時間もかかるため湯檜曾川に沿って新道へ降りたがスキー跡があるだけでトレースをつけながら進んだ一ヶ所右岸を巻く所の斜面で時間がかかった。２～３度休憩したが思ったよりも早く慰霊碑下の道路についた。彼等はこれからいろいろ大変だろうなと思いつつ警察官が配った缶ビールを飲んだ。センターにより署名を済まし、荷物をほおってきた一ノ倉沢出合小屋にもどり荷物を回収して今回の山行を終えた。

宮浦先輩の教え　by　松山茂実

朝霧入会後まもない頃、宮浦さんに言われた。
『僕とか、私とか、言わないの。「俺」て言えよ。』と言われたので、そのときから、私は、できるだけ、俺と自称するようにしている。しかし、ついつい、宮浦さんの前では、『僕』と言ってしまう。

ピトンの打ち込み方を教わっているときである。宮浦さんが言った。『自分の打ち込んだピトンは、どうしても信用できないんだよなあ。さびかけた残置ピトンのほうが、なああんか、頼りがいあるんだよ。おもしろいよな』
俺は、なんか、感動した。なにやら、哲学的な背景を感じたからだ、この言葉に。で、応じた。
『僕のと、木戸のと、伊藤さんのと、選ぶなら、どれにします？『ああ？決まってんじゃん。自分で打ち直す。』

集会に出るために山荘に行くと、よく、宮浦さんが先についていた。すると、『ほら、なんか買ってこい。ビール忘れんな』と平気で一万円札を渡された。俺は、不思議と、そんな宮浦さんが頼もしく見えた。別に、お金をくれたからではない。なにか、不思議に、宮浦さんの『お遣い』をしたくなる、そんな雰囲気のある、かっこいい先輩だ。

始めてどこかの山に一緒に入ったときのことを思い出した。確か、奥多摩のつづら岩のゲレンデだったような気がする。バンダナを、きちんときれいにたたんでザックにしまっていたのを見て、几帳面なひとだなあ、と尊敬の念を抱いた。

　宮浦さんは、とっても几帳面で、身の回りのものを丁寧に整理していた。人との接し方にも、いつもあったかい笑顔を振りまきながら、頼りがいのある、とってもしっかりした印象を与えてくれる先輩だ。山岳会に入ったことを内心、不安に思っていた家内が、宮浦さんに接する度に、『宮浦さんと一緒だったら大丈夫ね』といってくれた。宮浦さん、尊敬しています。

　そういえば、つづら岩で思い出したことがある。宮浦さんとは、何回もつづら岩に行ったのであるが、あるときのこと。アプローチののぼりで、すこし、ねん挫するようなことが起こった。ぐきっと、感じた。それで、宮浦さんに、「ちょっと、足、痛いので、先行ってください」といった。「どうしたん？」
「ちょっとねじったようなんです」「大丈夫大丈夫。痛いのは、気のせいだよ。ほら、いくぞ」と言われた。

　この言葉に、不思議と、救われて、自信をもらった。「ああ、気のせいですね、これは、確かに」と答えたら、全く、何ともなくなった。それ以後、なにか、ある度に『それは、気のせいだよ』と、宮浦さんのイメージに励まされるようになった。山だけでなく、日々のいろいろな場面で。

この励ましは、今でも、よく頂く。　　宮浦さん、ありがとうございます。

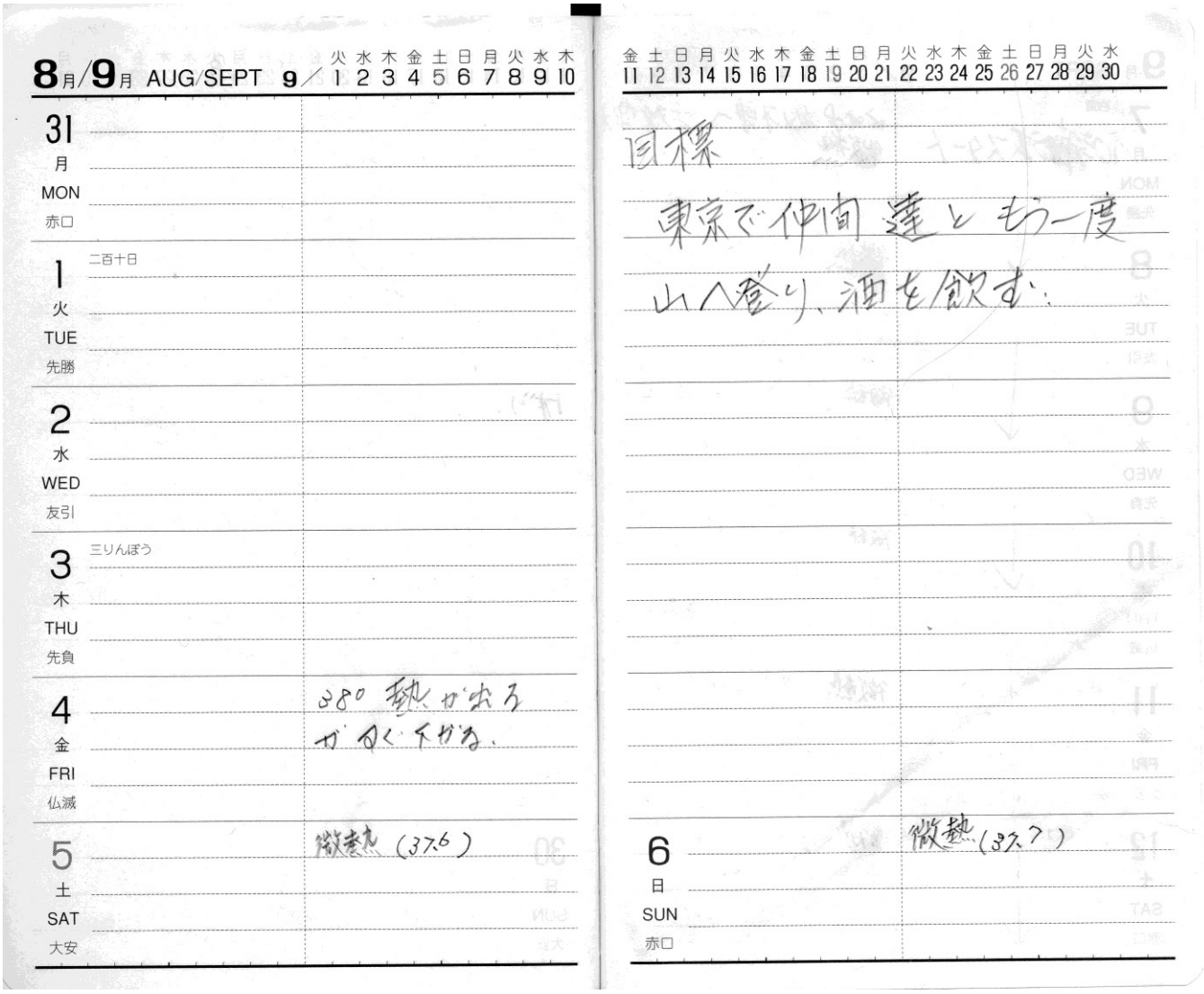
松山 茂美 記

宮浦を想う

11月３日、「山口さん！宮浦ロクちゃった！これから山口県に向かいます！」と言う伊藤からの電話。とうとう最悪が来てしまった！５月に「宮浦が検診でガンが見つかった！」と言う話を聞き、その後、平井の居酒屋で「宮浦を励ます会」を皆でし、その後彼は広島で入院し、治療に入り、その様子は、ショートメールのやり取りをし、その都度会員に情報を伝え、なかなか返信がこないなあーと思っていたら、一回も退院出来ずに、一回も生の声を聞けないまま、あっと言う間に逝ってしまった。居酒屋で「大丈夫！勝って必ず帰ってきます！」と力強く言い、メールで何回も「朝霧祭りで、皆で飲みましょう！楽しみにして頑張ります！」と。今でもその言葉が耳に残っている。

彼は会に入った頃大学を辞めていて、頼まれて私の勤めていた会社で、新築工事現場の補助的な仕事を数年してもらっていた時期もあった。会では15年間山を共にし、27回の回数、計60日以上一緒に山行をし、寝起きを共にしてきたが思い出は尽きない。新人の夏の剣岳登攀合宿では本峰A1稜、池ノ谷右俣ドーム稜をそつなくこなし。一ノ倉沢烏帽子沢奥壁の継続、衝立岩の雲稜第一残業では体力をみせた。5月の不帰1峰～五竜G5では闇夜の中、誤って汚い雪も飲んだ仲だった。正月の西穂高～奥穂高岳、5月の黒部別山南尾根は厳しくも楽しい山行であった。二年連続の5月の八ツ峰ではドシャ降りの雨で、テントの中でオシッコしてしまい、その後酒を呑むたびに言われたっけ。三月の滝沢リッジはチーフリーダーになった時期でもあったし安心して見ていられた。正月の北ア唐沢岳東尾根～餓鬼岳は雪との戦い。夏の穂高岳登攀合宿、その他にも八ヶ岳、松木沢にも行った。岩、氷、沢、縦走とオールラウンドプレーヤーだったし、俺の誘いも断らかった。どういう訳かここ１０年は山に行かなくなったが、会の行事には必ず顔をだし、朝霧を愛していたと思う。「宮浦！天国の扉を開けると、森まっちゃん、辰子、民子、姉さん、会のOBの人達がいるよ！」

山口 秀男 記



2009年9月初 転院先にて　宮浦（自筆）手帳より

宮浦からのラストメール・メッセージ　　山口 秀男 編集

2009 年

6 月 22 日 11:12　「元気です。今日から、化学療法始まりました。明日から、放射線療法。声が出ないのでメールでお願いします。

6 月 23 日 17:18 「今日から放射線療法です。土日祝日を除いて毎日、8 月 4 日までの予定です。長い入院生活、楽しむ方法はないでしご知恵を。」

6 月 27 日 18:11 「抗がん剤の副作用で昨日は、すこしだるい。今は、回復。月曜日からまた放射線療法。」

7 月 3 日 21:01　「絶飲食 2 週間目突入。このままだとあと一カ月続きそうです。でも頑張るしかないですね。」

7 月 3 日 21:10 「了解しました。みんなで一杯やりましょう。」

7 月 4 日 17:59 「頑張ってます。今年の朝霧祭、みんなと一杯やることを楽しみに闘ってます。気合いだー、十連発。」

7 月 18 日 10:44 「朝からうるさいし、クマゼミがないてうるさいし、暑いです。暑いといっても院内ですけど。体調は変わらず。先は長いけど。頑張ろう。

7 月 24 日 14:00 「昨日から化学療法始まりました。まる四日間の投与です。最初と同じであれば多少の副作用は覚悟です。飯は点滴のみです。体重は 50 キロ弱。元気。」

8 月 21 日 10:24 「昨日、栄養を直接胃から吸収するための簡単な手術をしました。これが落ち着けば、転院になると思います。山、時間切れ残念。それとも、計画自体にむり」
（私の、南アルプス 5 日間全山縦走が、5 時間足りず完走できなかった事を示す。）

9 月 4 日 11:23　「主治医の紹介で、市内のシムラ病院と言うところへ転院しました。来週から化学療法を始める予定です。」

9 月 16 日 18:01「化学療法一カ月の予定。今、2 週間目です。副作用なし。退院は、難しい。気管切開しているので。」

10 月 13 日 17:34「もう１０月ですか。朝霧祭ですね。またみんなでワイワイやりたいですね。それを楽しみにがんばってます。」

……

宮浦 入会前後の会動向

年 代	西暦	会 長 名	C L	当年入会者	主 な 会 行 事 など
昭和 55 年	1980	山中 直行		大川文子	1980
昭和 56 年	1981	山中 直行		今井玲子	1981
昭和 57 年	1982	山中 直行		村上正明	朝霧五十周年(永田町 憲政会館)
昭和 58 年	1983			川又浩子	1983
昭和 59 年	1984		山口 秀男	小島 豊 伊藤 守	朝霧祭 (奥多摩氷川ｷｬﾝﾌﾟ)
昭和 60 年	**1985**		田村 正己	**宮浦 達也** (5 月) 塚田 秀美	朝霧祭 (奥多摩氷川ｷｬﾝﾌﾟ)
昭和 61 年	1986	西原 正	田村 正己	鈴木 典仁	10,25～26 朝霧祭 (奥多摩氷川ｷｬﾝﾌﾟ)
昭和 62 年	1987	西原 正	伊藤 守	清水 久江 畠中 みどり	10,31～ 1 朝霧祭 (奥多摩氷川ｷｬﾝﾌﾟ)
昭和 63 年	1988	西原 正	伊藤 守	根岸 直人 林 英子	10,29～30 朝霧祭 (奥多摩、奥茶屋)
平成元年	1989	西原 正	伊藤 守		10,28～29 朝霧祭 (奥多摩、奥茶屋)
平成 2 年	1990	西原 正	伊藤 守		10,27～28 朝霧祭 (奥多摩、奥茶屋)
平成 3 年	1991	西原 正	伊藤 守		10,26～27 朝霧祭 (奥多摩、奥茶屋)
平成 4 年	1992	西原 正	伊藤 守		9,27 朝霧六十周年(新宿、東京大飯店) 11,14～15 朝霧祭 (奥多摩、奥茶屋)
平成 5 年	1993	西原 正	伊藤 守	松山、木戸、山崎	10,30～31 朝霧祭 (奥多摩、奥茶屋)
平成 6 年	1994	西原 正	宮浦 達也	吉野、岡村、大山、 伊藤(英)、小島(弟)	10,30～31 朝霧祭 (奥多摩、奥茶屋)
平成 7 年	1995	西原 正	宮浦 達也	平野	10,28～29 朝霧祭 (奥多摩、奥茶屋)
平成 8 年	1996	西原 正	宮浦 達也	中館、中島、大村	10,26～27 朝霧祭 (奥多摩、奥茶屋)
平成 9 年	1997	西原 正	宮浦 達也	ジョン、瀬川	10,25～26 朝霧祭 (奥多摩、奥茶屋)
平成 10 年	1998	西原 正	宮浦 達也		10,24～25 朝霧祭 (奥多摩、奥茶屋)
平成 11 年	1999	西原 正	大山 元市	アラン	10、30～31 朝霧祭 (奥多摩、奥茶屋)
平成 12 年	2000	西原 正	大山 元市		10,28～29 朝霧祭 (奥多摩、奥茶屋)
平成 13 年	2001	西原 正	木戸 伸一	仲	10、27～28 朝霧祭 (奥多摩、奥茶屋)
平成 14 年	2002	植田 宗男	木戸 伸一	岩田、斉藤、安間	10、27～28 朝霧祭 (奥多摩、奥茶屋)
平成 15 年	2003	植田 宗男	瀬川 裕之		11. 8～ 9 朝霧祭 (奥多摩、奥茶屋)
平成 16 年	2004	植田 宗男	瀬川 裕之	金崎	朝霧祭 (奥多摩、奥茶屋)
平成 17 年	2005	植田 宗男	瀬川 裕之	篠原	9,11 朝霧 70+3 周年 (錦糸町、ロッテ会館)
平成 18 年	2006	植田 宗男	瀬川 裕之		
平成 19 年	2007	植田 宗男	瀬川 裕之		
平成 20 年	2008	植田 宗男	伊藤 守(暫定)	山下	元会員 朝霧祭 (奥多摩、檜原)
平成 21 年	2009	植田 宗男	金崎 智裕		

宮浦へ

　このような山行集、宮浦は嫌いだろうが、まぁ伊藤さんのけじめ癖(ｸｾ)と思って勘弁してください。

昨年５月２０日朝の電話で「ちょっと話がある！」から始まり、アパ―トの鍵を私に預けて、さっさと広島の病院に入院、---- そして -----　即、死んじゃうのって、それはないよなぁー

５年後の生存率を聞いたとき「きびしい！！」ことは判っていたけど、宮浦なら何とかなると思っていたのに---

６月、７月、８月、９月、１０月で終わりなんてどうみても早すぎるなぁ---

　だからこっちもアパートの片付けを１１月中に終え、電気、ガス、電話、携帯、インターネットサ―ビスの解約手続きもあっというまに終えちゃったよ ---

四十九日、正月、朝霧新年会、そしてこの山行集完成とあっというまに終えてしまい、今はちょっとした空虚感があります。

　でもこの短い期間に、宮浦のお母さん、お兄さん、そしてお父さん、お寺の住職さん、アパートの大家さん、会社の人達、そうだ忘れちゃいけない駒大探検部の皆さん、朝霧の元会員、普段顔を出さない先・同・後輩とたくさんの人と合い--- 宮浦のことを語り合い

実に宮浦は幸せ者と実感しました。

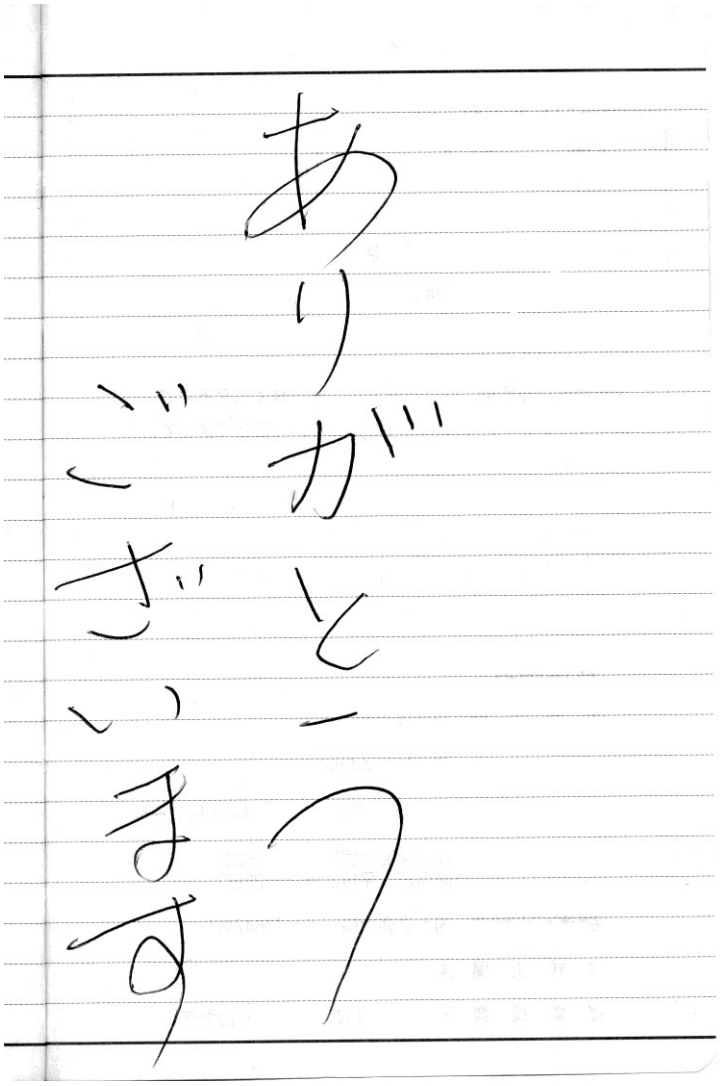
今度は宮浦が、皆を見守る番だぞ---でも、全員見守るのも大変だろうから！
地球一、宮浦をこよなく愛している、お母さんを鉄壁な守りでお願いだぞ---

後はそうだな、アメリカの研究所にいる後輩の松山かな、山は今一なのでせめて「ノーベル賞」をとるように---
　次は後輩で筋はいいんだけど、御託を並べ過ぎの金崎だなー アンデスなんかの計画を妄想しているようだが、ヒマラヤカラコルムに眼を向いてもらいたいよな---

　あーそうだ 朝霧のことは実家の机にあった置き手紙とおり、西原―植田―山口―伊藤のラインで何とかするから心配するな---。

 最後に普通このような山行集はじっくり時間をかけて作成するのがいいのは十分解っているのですが、時間をかけてもかぎりがありますので、原稿をご依頼した皆々様にご負担をかけたこと、ご勘弁ください。

伊藤 守



2009年9月頃　宮浦(自筆)手帳、末尾に

裏表紙 写真：谷川岳 烏帽子奥壁 南稜にて

発行者 東京朝霧山岳会
〒132-0035 東京都江戸川区平井6-7-5
朝霧山荘内
発行日 2010年3月21日 (a)
編集者 宮浦 達也 山行集'編集委員会
山口 秀男(原稿・写真) 塚田 秀美(原稿・写真)
木戸 伸一(原稿) 伊藤 久江(原稿) 林 英子(原稿)
松山 茂美(原稿・写真) 伊藤 守(原稿・調整・CG・編集)
●本報告書は宮浦達也残り金の一部にて作成・郵送しました。
●本報告書は宮浦達也本人のパソコンにてワープロ ・ メールで原稿交換 ・ プリント作成しました。